

さらば、猫

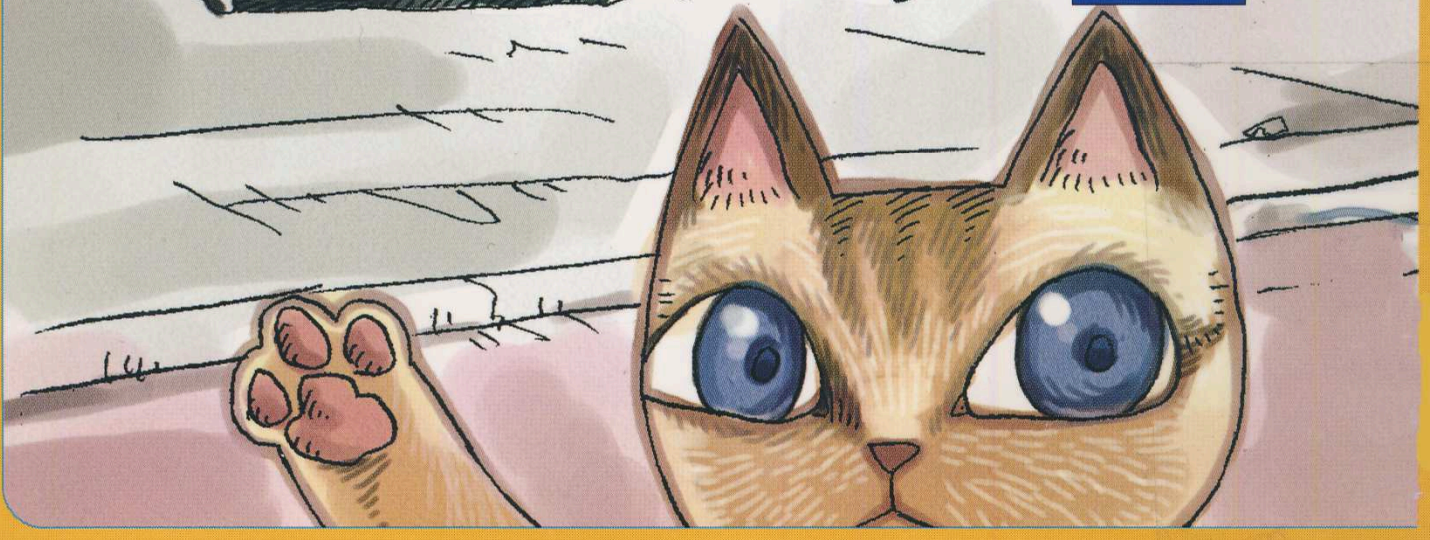
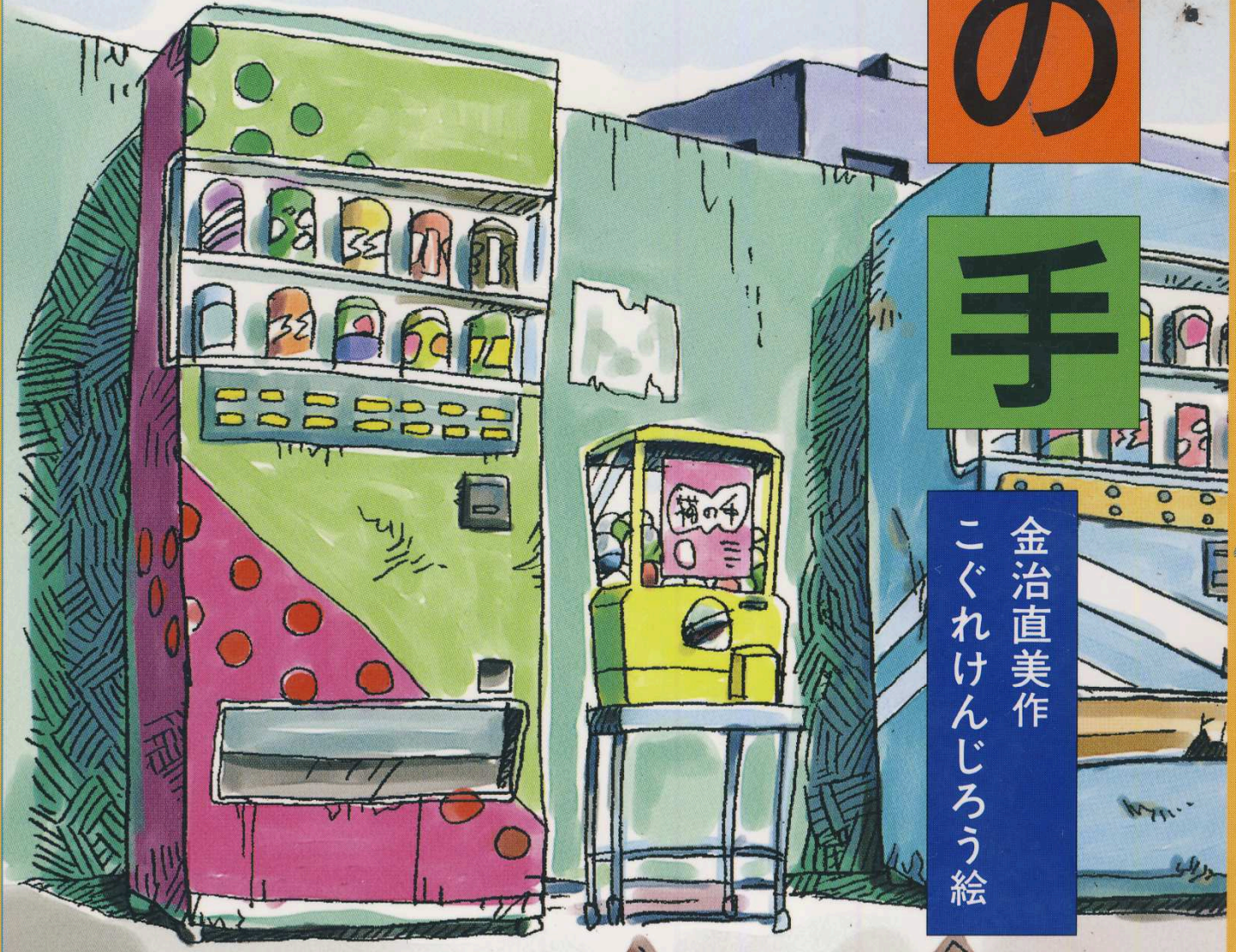
ねこ

TSUKIMI

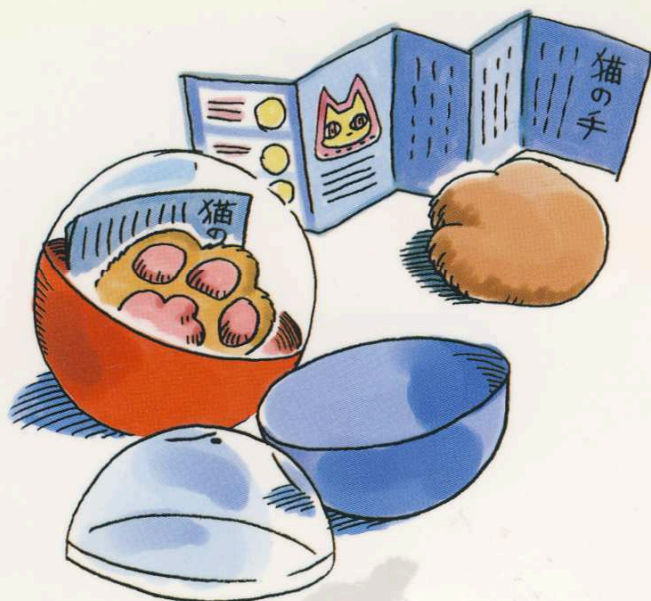
の

手

金治直美作  
こぐれけんじろう絵



さらば、猫の手  
ねこ  
金治直美作  
こぐれけんじろう絵  
岩崎



「猫の手」もかりたいほどいそがしいときってあるよね。

いまのぼくがそうなんだ。

スイミングスクールや音楽教室にかよっているし、塾の学習プリントも毎日こなさなければならぬ。

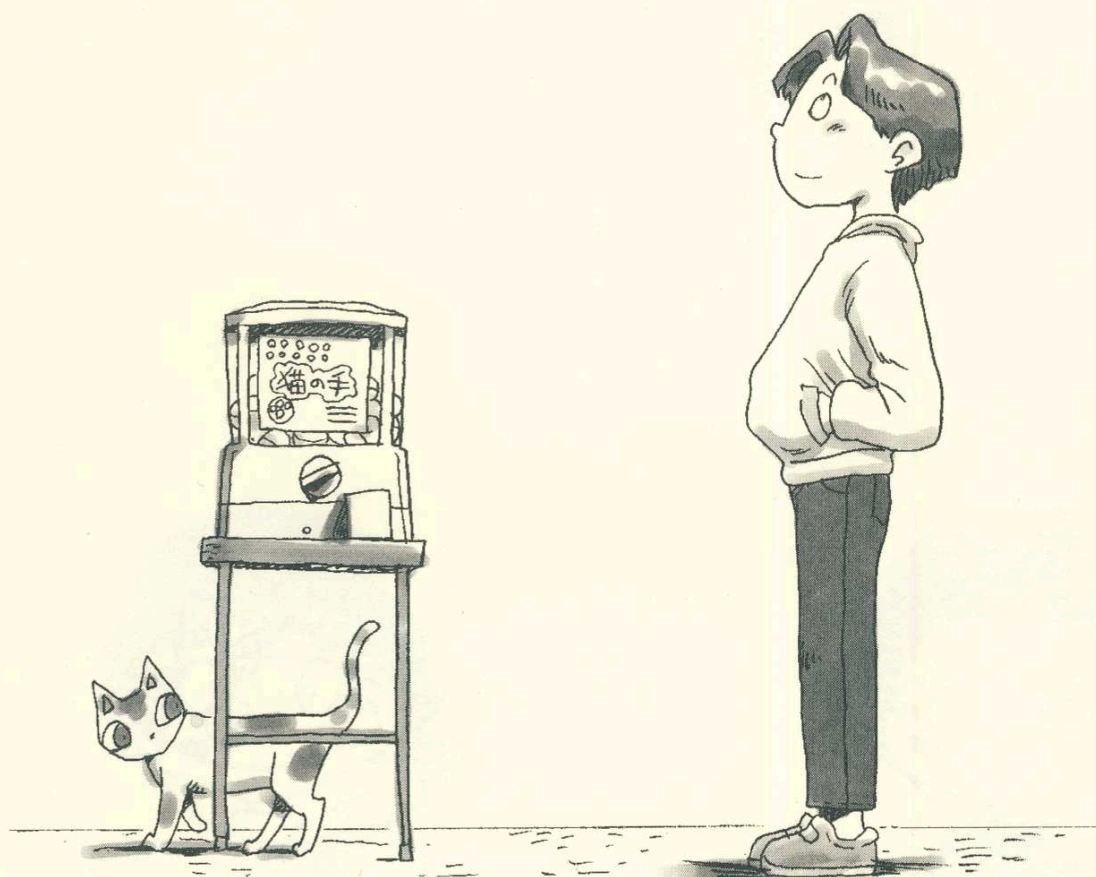
おまけにきょうは、先生から「漢字六百個」のバツ勉強までだされてしまった。

これでは、いちばん好きな、まんがを描くひまもない。

「猫の手」でもあればなあ。

# さらば、<sup>ねこ</sup>猫の手<sup>て</sup>

金治直美作・こぐれけんじろう絵



岩崎書店

もくじ

- 1 これって、史上最大のピンチかも 6
- 2 「猫の手」って、ほんものだったりして 16
- 3 「パーフェクト・アイテム」のぬけ毛 35
- 4 スイミングという「仕事」 48
- 5 「花のワルツ」ふきとぶ 70
- 6 かまいたち事件 85



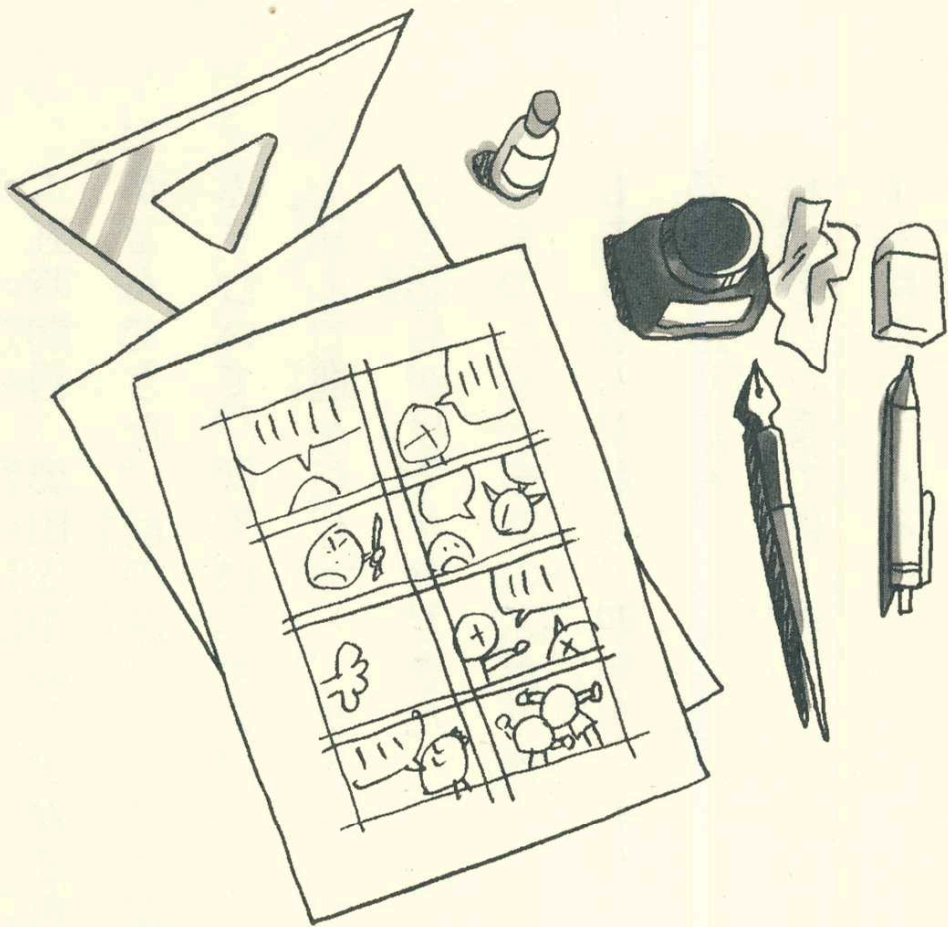
7 ひみつは「みつ蜜の味あじ」 102

8 さらば、ねこ猫の手て 118

表紙・さし絵 こぐれけんじろう



さらば、  
猫の手<sup>ねこ</sup>



# 1 これって、史上最大のピンチかも



「そこ、おしやべりしない！」

五時間目、奥田先生のトンガリ声

がとんできた。前の席のコースケが

ふりむいて、ぼくに「オレ、セクタ

ールまで進んだぜ」と、ゲームのこ

とを話しかけてきたときだ。

「まったく、そのふたりは、いつ

もこうなんだから。四年生にもなっ

て。あんたたち、バツ勉強だから

ね。あしたまでに、漢字三百個、ノ

ートに書いてくること」

先生、そんなあ、とぼくはいいた

かった。

ぼくはいま、ひとことだつてしゃべっていない。

授業中のシャベリはいつだつてコースケのほうで、ぼくはせいぜいウンとか、ああ、というだけだ。でもそんなことを先生にいったら、あとで、コースケになにされるかわからない。

奥田先生はよくこうやって、ちよつとしたことでバツ勉強させたり、「校庭一周走つてきなさい」とかいいだす。でも、ぼくはわりと、というか、かなりまじめなほうだから、バツ勉強ははじめてだった。

漢字三百個！ ぼくは漢字練習ほどころいなものはない。三百個つてい  
つたら、漢字ノートまるまる二ページじゃないか。

ぼくがペシャンコの顔をしていたら、コースケがイヒツとわらいながら、  
ささやいてきた。



「あれって、『漢・字・三・百・個』って、一回書けばいいんだぜ。奥田セ  
ンセ、けっこーシャレ飛ばすからな」

「それ、ほんと？」

「ほんとだって。オレはそうするぜ。おまえ、わざわざ、たいへんなことし  
たいわけ？」

「う、ううん、まっさか。ぼくもそうするさ」

たしかに、奥田先生はたまーに、シャレをいう。「ふとんがふつとんでし  
まった」とか、「鳥肉はとりにくい」とか。でも、たいてい、だれもわらわ  
ない。奥田先生はぼそつと小さい声で、ふだんと同じ顔をしていうから、シ  
ヤレなのかどうか、すぐにはわからないのだ。

先生の顔も、おこっているのか、わらっているのかよくわからない。目が  
ほそくて、粘土のかたまりに、粘土ベラの先っちょで、すつと切りこみを入



れたみたいだ。実際じっさいにおこることは少ないけど、わらうことはもつと少ない。

まあ、シヤレが好きなのはほんとうみたいだよな……。ぼくはコースケの話を信じて、その晩ばん、ノートに大きく「漢・字・三・百・個」と書いた。

つぎの日、ノートを先生せんせいに提出ていしゅつしたら、

「桜井くん！」

いきなり、おこられた。先生せんせいはほそい目で、ぼくをチクツと見ていう。

「先生せんせいをばかにしてるわけね！」

ぼくが口くちをばくばくさせていると、

「漢字かんじ、あしたまでに書いてくること。ただし六百個こ！ いい？ 二学期がっきになつて習ならった漢字かんじを一行いっぎょうずつだからね」

コースケは、漢字かんじがぎっしりつまつた自分のノートじぶんをひらひらさせて、ニヤニヤわらう。

「桜井<sup>さくらい</sup>って、すなおーつ。おもしろいよなー」  
くそーつ、なんで、こんなやつ<sup>しん</sup>のいうことを信じた<sup>しん</sup>んだろう。

かえり道<sup>みち</sup>、急ぎ足<sup>いそあし</sup>でぴゅんぴゅん歩<sup>ある</sup>いた。早く<sup>はや</sup>かえって、バツ勉強<sup>べんきょう</sup>をや  
らなければならぬからだけど、そんなのがなくても、ぼくはいつも早足<sup>はやあし</sup>だ。  
毎日<sup>まいにち</sup>のように、スイミングスクールやヤマカワ音楽教室<sup>おんがくきょうしつ</sup>のレッスンがある  
からだ。だらだら友だち<sup>とも</sup>としゃべりながら歩<sup>ある</sup>いていると、おくれそうになっ  
てしまう。だから、学校<sup>がっこう</sup>のかえりは、いつもひとりだった。

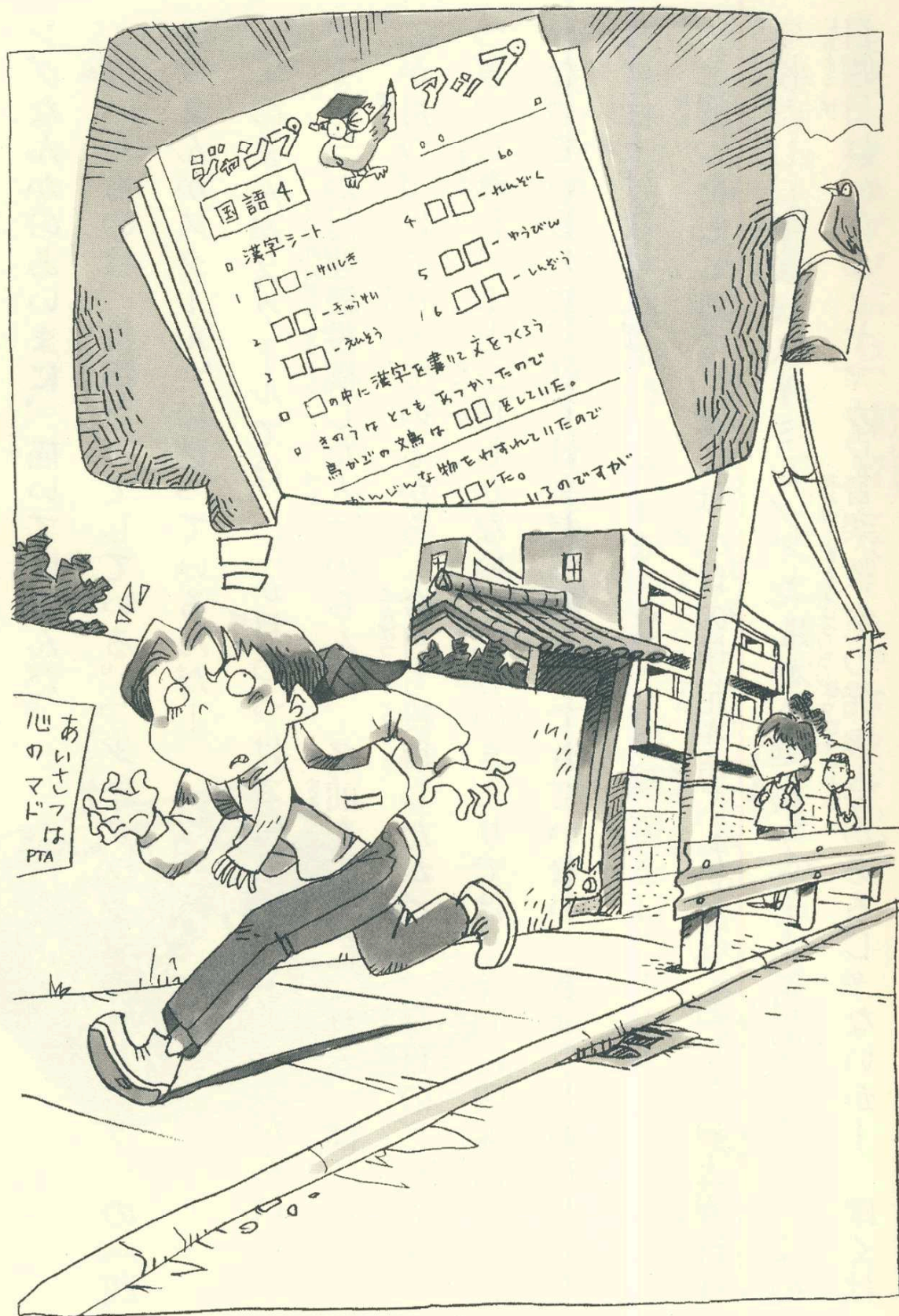
きょうは金曜日<sup>きんようび</sup>で、ヤマカワもスイミングもない日<sup>ひ</sup>だから、なんとか漢字<sup>かんじ</sup>  
をやっつけてしまえるだろう。

そのとたん、たいへんなことを思い<sup>おも</sup>だした。やっていないジャンプアップ  
のたば！

ぼくは一年生ねんせいのときから、「みみずく先生せんせいのジャンプアップ学習がくしゅうシート」をやっている。テスト形式けいしきの問題もんだいプリントが家いえに送おくられてきて、それを毎日まいにちやって、週一しゅういち回かいまとめて送おくる。しばらくすると、まちがいをなおされ、点数てんすうがつけられて返かえってくる、というやつだ。

ぼくはこれまでもずっと、ほんとうにずうつと、きちんと答こたえを書かいて送おくっていた。でも、この二週間しゅうかんというもの、一枚まいもやっていなかっただ。しめきりも、とつくにすぎている。こまって、シートのたばと専用せんようの封筒ふうとうをベッドの下したにつつこんで、おかあさんには「もう送おくったよ。ポストにちゃんと入いれてきた」といってしまったのだ。

なぜここまでシートをためこんでしまったかというのと、じつは、このところ、まんがにのめりこんでいたからだ。読よむほうじやない、描かくほうだ。それも、ただの絵えじやない、四コマまんがだ。毎日まいにち学校がっこうからかえると、スイミ



アハハ  
国語4

- 漢字シート
- 1   - 川しき
  - 2   - きのり
  - 3   - ねむい
  - 4   - ねむい
  - 5   - やうび
  - 6   - れんげい
- の中に漢字を書いた文をさがし  
そのうけとともあつたのび  
あかしの文脈を  にしなさい。  
あつたものを  にしなさい。

心のマドフはPTA

ングなんかのあいまに、描かいているんだ。

描かいたものは、投稿とうこうだつてしている。「少年フラッシュコミック」の「四コマまんがスクール」に送おくっているんだ！

このまんがスクールでは、三か月つづけて投稿とうこうすると、「☆がんばったぞ！ 三か月連続投稿げつれんぞくとうこうした人ひと」のらんに、名前なまえをのせてくれる。ぼくはこの二か月つづけて送おくっているから、今月こんげつも投稿とうこうしたかった。今月こんげつのしめきりは、つぎの日曜日にちようび。あと三日みっかしかない。応募おうぼのきまりでは、一回かいに四編へん送おくることになっているのに、ぼくはまだ二編へんしかできていない。きょうとあしたのうちあに仕上げしあなければ。

と思おもったところで、ぼくは土日どにちの予定よていを思おもいだした。あしたの土曜日どようびは学校がっこうだし、午後ごごはスイミング。たしか、進級しんきゅうテストの日ひだ。あさつての日曜日にちようびは、なんとヤマカワ音楽教室おんがくきょうしつの発表会はつぴようかいがあるじゃないか！ ぼくは

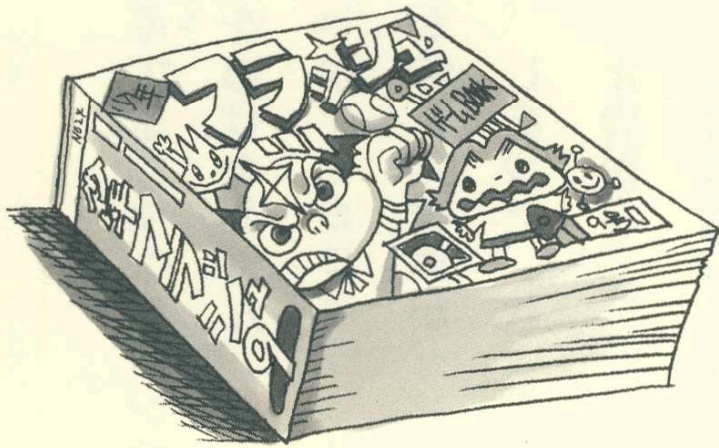
まだヘタクソだから、練習れんしゅうしなくちゃならない。

ひよつとして、これって、史上最大しじょうさいだいのピンチかもしれないぞ。とにかく

早く家いえにかえって、おかあさんがパートの仕事しごとからかえる前に、漢字かんじだけで

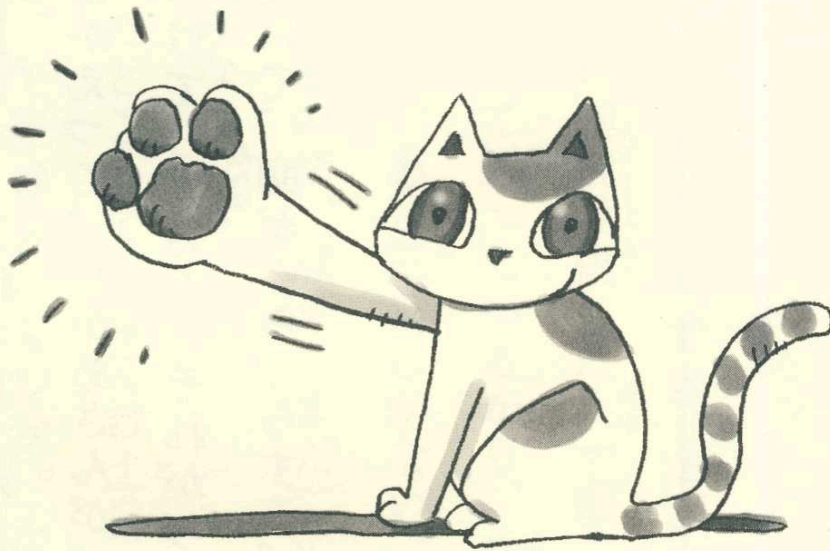
もかたづけてしまおう。それからピアノの練習れんしゅうをして……ああ、なんだか、

考えたかんがだけで、頭あたまがくらくらする。





## 2 「猫の手」って、ほんものだったりして



ぼくの家はマンションの三階だ。

ドアをあけたとたん、

「リュウイチロー！」

おかあさんの声がガンガンふつてきた。しまった、きょうは仕事、休みだったのか。

「これはなによっ」

おかあさんが目の前にさしだしたものを見て、ブルった。ジャンプアップ・シートのたばだった！

それに、小さい飲み物のパックが三個。ビフィズスミルク・ミルクポン

だ。おなかがいいから、毎日一パック飲みなさい、といわれていたのに、三日のあいだ、飲むのをさぼって、冷蔵庫の奥にかくしていたのだ。こんなものまで見つかってしまうとは。

「ジャンプアップ、もうだしたっていったよね。ミルポン飲んだっていったよね。なんで、こんなうそつくの！」

それから、さつき、ヤマカワの橋本先生から電話があつて、『発表会の曲、ひけるようになってないから、練習をみてあげてください』って！  
「どういうこと？」

ぼくの頭のなかはまっ白になつて、返事できなかつた。

「いままで、こんなこと一度もなかつたのに。いつもまじめに、ちゃんとやつたのに。いつのまに、こんな悪い子になつたのよ？」

ぼくは、これはかなりヤバイ、と思つて返事できなかつた。

「だまってないで、なんとかいいなさい！」

ぼくは、なんといいわからなくて、返事できなかつた。

おかあさんは、つつたままのぼくの肩をゆさぶつた。

「口がなくなっちゃったの？ 返事もできないわけ？ そんな……そんな悪

い子は、うちの子じゃありません！」

ぼくは玄関のそとにおしだされた。バドン、とドアの音、ガキリ、とカギ

の音。

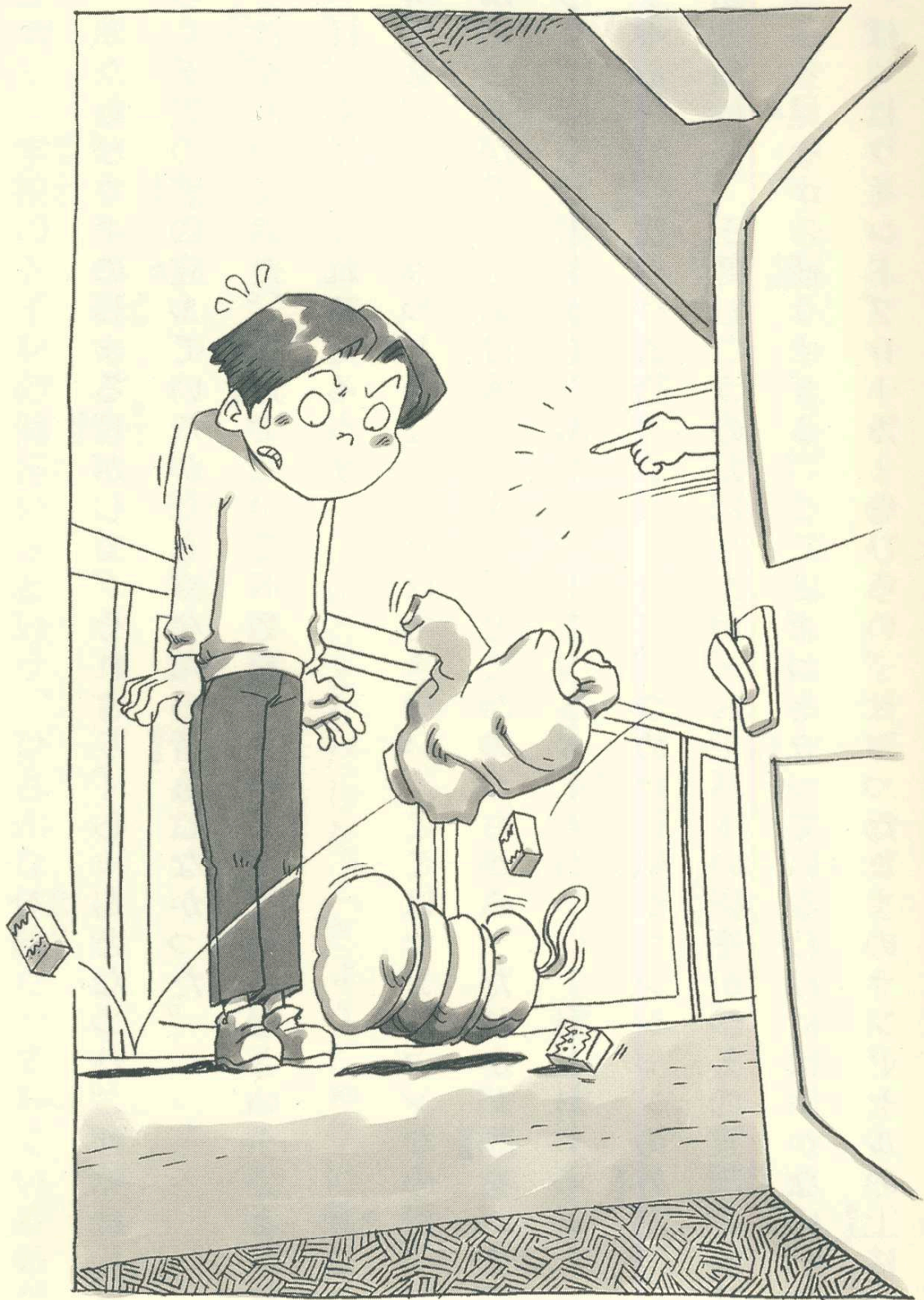
少したつて、ドアがあいて、ぼくのさいふと、ウインドブレーカーがとん

できた。それから、まいたふとんのようなものが放りだされ、最後に、ポン

ポンポンとミルポンが三箱。

「もうかえつてこなくていい！ 夜はてきとうなところをさがして、寝るこ

と。学校はちゃんといくこと。ミルポンは、きょうのうちに飲んでしまうこ



と」

ふたたびカギのしまる音おとがして、それきり、しーんとなった。ぼくはしばらくドアの前まえに立たっていたが、もうなんの音おともしなかった。

涙なみだがわいてきた。大声おおごえでなくてドアをたたいて、ごめんなさい！ とさけばば、あけてくれるだろうか。

でも、そんなみつともないことはできない。ここはマンションなのだ。おあさんがドアをあけるより先さきに、どこかのうちから、だれかが顔かおをだすだろう。ぼくは涙なみだを飲みこんだ。

十一月がつの空そらはもう薄暗うすぐらくなつてきて、つめたい風かぜがマンションの外廊下そとろうかをふきぬける。三軒けんむこうのおばさんが、スーパールの袋ふくろをかかえて、ぼくをじろじろ見みながら通とおりすぎる。ここにずっと立たっているわけにはいかない。

ぼくはウインドブレーカーをひろい、せおったままのランドセルの上うへにひ

っかけた。さいふとミルポンのパックをズボンのポケットにつっこみ、ふと  
んみたいなものをかかえあげた。それはキャンプ用のシュラフだった！

とにかく、そとにしよう。同じクラスおなの竹原あゆみも、ここの五階かいに住す  
でいるのだ。あいつにだけは見みつかりたくない。

シュラフは重おもくはないが、かかえていると歩あるきにくい。ぼくはマンション  
の少すこし先さきにある児童公園じどうこうえんへいき、ベンチにすわりこんだ。たすかった、公園こうえん  
にはだれもない。

三パックのミルポンをポケットからとりだした。「きょうじゅうに飲のむこ  
と」か。やっぱり、飲のまなくちやいけないだろうか。ぼくはしかたなく、ス  
トローで、そのあまつたるい飲のみ物ものを飲のみこんだ。

ぼくはおなかが弱よわい。急きゅうにいたくなつて、トイレにかけこむことがときど  
きある。学校がっこうのトイレの個室こしついきという、ひさんな体験たいけんだつてしているのだ。

それで、おかあさんにいわれたとおり、もう何か月もミルポンを飲みつつづけている。でも、おなかいたはあいかわらずだ。そのうえ、めためたあまいので、あきあきして、冷蔵庫の奥にかくしてしまっただのだ。おふろあがりだつたら飲めるかな、と思つていただけなのに。

少し寒くなつてきたので、ウインドブレーカーを着た。うちのマンションは、もうどの窓もあかりがついている。ぼくだけ、なんでこんなところにいるんだろう。

風がピルルツと体にあたる。ゾクツと寒気がして、おなかがへんな感じになつてきた。ツンツクツンツン、おなかのなかで反乱がおきているみたい。これつて、いたくなる前ぶれだ。つめたいミルポンの一気飲みいっきののせいかもしれない。いまのうちに、トイレのあるところに、いつておいたほうがいい。爆発寸前のおなかをかかえて、トイレをさがすなんてまっぴらだ。

ぼくはランドセルとシユラフをベンチにおいて、歩きだした。五分くらい  
のところにある、小さなスーパーにいくつもりだった。そのトイレは、店  
の横に入口があるので、店内まで入らなくてもすむ（じつは、ヤマカワのか  
えりに、かけこんだことがあるのだ）。

スーパーは大通りにあるのだけど、となりがカオル進学塾、何軒かむこ  
うには、ビクトリー英語教室もある。知っているやつとでくわすかもしれ  
ない。裏のほそい道をとおってもいかれるはずなので、ぼくはそっちに曲が  
った。

そこは暗い道だった。なにかの古い工場のへいと、倉庫みたいな建物の  
あいだのほそい道路なので、車も人もとおらない。足音がきこえらと思つて  
ふりかえったら、だれもいない。自分のくつの音だったらしい。

おなかはいいかかわらず、ツンツクしている。これがドンドコドンといたく





ならないうちに、スーパーにつかなくては。

なんだか、またなきたい気持ちきもちになってきた。おかあさんは、もうぼくなにかかえってこなくていいと、ほんきで思おもっているのだろうか。シユラフまなで投なげてよこすなんて。

バツ勉強べんきょうのことがおかあさんにバレていないのだけは、助たすかった。けど、ヘンだな。「学校がっこうはちゃんといくこと」だつて？ 家出いえでしながら学がっこう校なんで、いけるわけがないじゃないか。おかあさん、めちゃくちゃだ。ぼくはどうすればいいのだろうか？

やっぱり、かえって、あやまるしかないだろうな。「もううそをついたり、ごまかしたりしません。これからちゃんとやります」って。

ああ、でも……。

これから漢字かんじ六百個書かいて、ピアノの練れんしゅう習しゅうをして、ジャンプアップシー

トをやっつけるのか。おかあさんの口ぐせは「ベストをつくしなさい」だ。

「しめきりをすぎていてもやりなさい」というだろう。あれは、一日四教  
科一枚ずつで、一週間二十八枚、二週間だと五十六枚！そこに今週分  
もたまつていくわけだ。

それにもちろん、学校の宿題もある。スイミングは週三回だ。いったい、  
いつになったら、ゆつくり、まんがが描けるっていうんだ？

まんがのことは、だれにもないしよにしている。もちろん、おかあさんに  
も。

「そんなヒマあったら、○○すればいいのに」って、きつととんでくるだろ  
うから。それに、描いているのをのぞきこまれたり、「できた？」なんてき  
かれたりしたら、すごーくイヤだ。これだけは、ぼくのひみつにしておくん  
だ、ぜったいに。

かえりたくない。かえって、あやまったって、なにも変わりはないんだ。でもほんとうの家出<sup>いえで</sup>なんて、できそうにない。トイレの場所<sup>ばしょ</sup>にもこまるくらいなんだから。

おなかをさすりながら歩く<sup>ある</sup>うちに、むこうに、ぽつと明る<sup>あか</sup>いところがあるのに気がついた。工場<sup>こうじょう</sup>のへい<sup>き</sup>のとぎれたあたりだ。自動販売機<sup>じどうはんばいき</sup>らしい、四角<sup>かく</sup>い大きな箱型<sup>はこがた</sup>のかけがある。そういえば、さいふを持<sup>も</sup>っていたつけ。なにかあったかい飲み物<sup>の</sup>でも買<sup>か</sup>って飲<sup>の</sup>めば、おなか<sup>すこ</sup>が少しおさまるかもしれない。ちかづいてみると、たしかに自動販売機<sup>じどうはんばいき</sup>だった。それも、五台<sup>だい</sup>も六台<sup>だい</sup>もある。でもどれもライトがついていないばかりか、赤茶色<sup>あかちやいろ</sup>にさびついたり、横<sup>よこ</sup>つちよがへこんだりしている。

明る<sup>あか</sup>いのは一台<sup>だい</sup>だけで、それはガチャンポの機械<sup>きかい</sup>だった。アニメやゲームのキャラクターのおもちや<sup>ひやくえん</sup>が百円ででてくるやつだ。

ぼくは、おなかのいたいのもわすれて、顔をちかづけて、まるいプラスチック容器のなかみを見た。

そこには、へんなものが入っていた。白や黒や茶色の、小さな毛糸玉みたいなものだ。玉といっても、ひらべったくて、梅の花みたいな形をしている。ぼくはガチャンポの機械に書いてある字を読んでみた。

「猫の手もかりたい」ほどいそがしい

小学生のキミへ！

この「猫の手」で、キミのなやみを

かいけつしよう

そうだ、ぼくもいそがしいんだ！ 「猫の手もかりたい」くらい。でも

「猫の手」ってなんだろう。この毛糸玉が「猫の手」なんだろうけど、なにかのお守りだろうか。お守りと魔よけとか、そういうヘンなものなら好きだ。キンキラだったり、ぶきみだったりするもの。

さいふをあけてみると、百円玉が六個、あとは十円玉、五円玉。百円玉を機械に入れ、ガチャリとハンドルをまわした。

ころんとでてきたまるい容器は、ふつうのガチャンポと変わりない。あけてみると、たしかに猫の手の先というか、足の先の形をしたものが入っていた。ほんものの猫みたいに、しなしなとした、ほそい毛におおわれている。毛の色は白で、ところどころに少し茶色の毛がまじっている。ひっくりかえしてみたら、ピンク色のぷよぷよした足の裏もちゃんとある。

まさか、ほんものの猫の足じゃないだろうな。ぼくは少し気味が悪くなり、指先でその「猫の手」を少しおしてみた。クシヤツという、ボール紙がつぶ

れるような手<sup>て</sup>ごたえだ。なーんだ、やっぱり作り物<sup>もの</sup>だ。なかはきつと、なにかのつめ物<sup>もの</sup>がしてあるだけなのだろう。

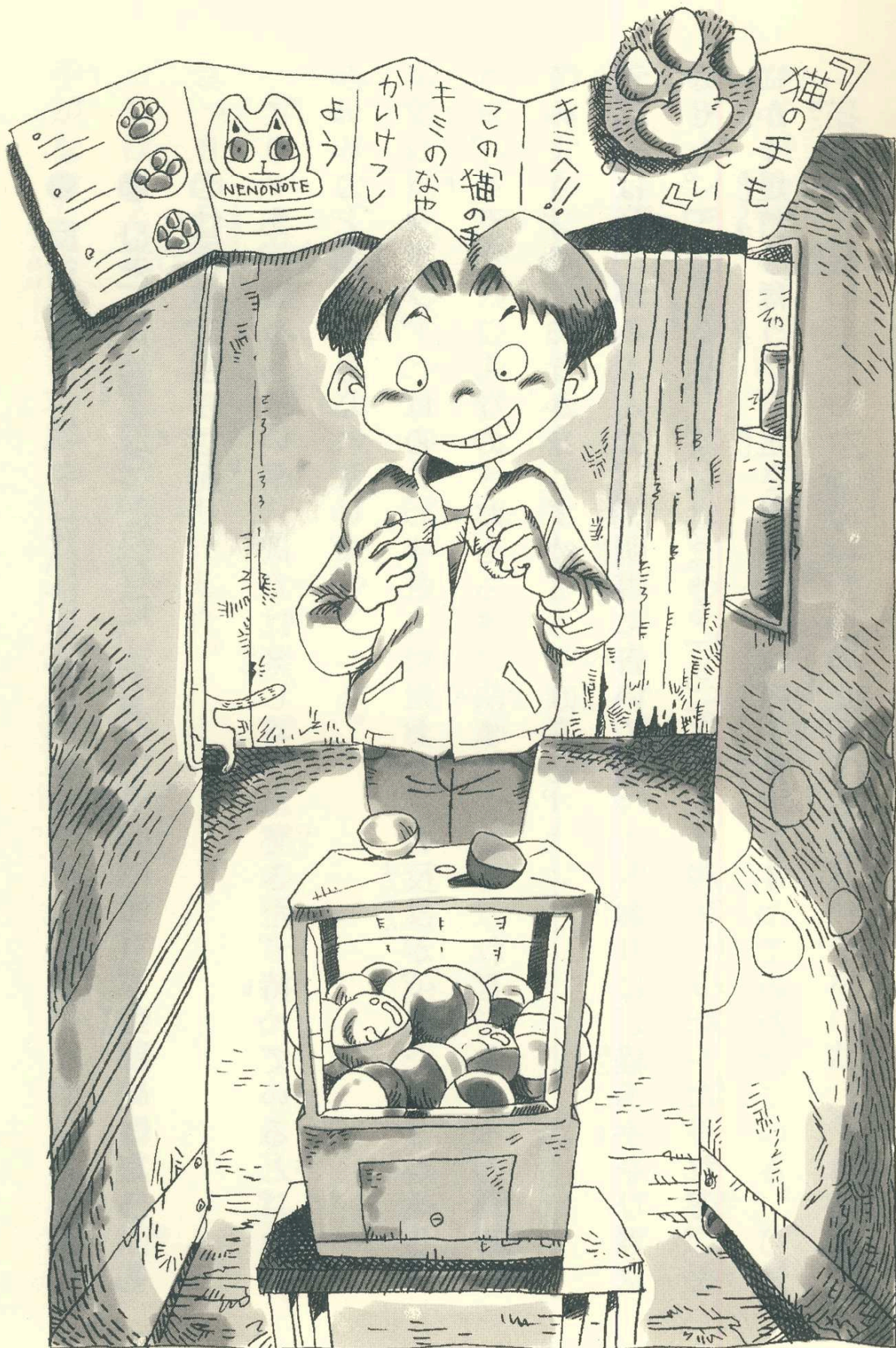
容器<sup>ようき</sup>のなかに、小さくたたんだ紙<sup>かみ</sup>がはいつていたので、ひろげてみた。

### 「猫<sup>ねこ</sup>の手<sup>て</sup>について」

この「猫<sup>ねこ</sup>の手<sup>て</sup>」は、人間<sup>にんげん</sup>のかわりに仕事<sup>しごと</sup>をしてくれます。でも、猫<sup>ねこ</sup>だから、力<sup>ちから</sup>仕事<sup>しごと</sup>や水<sup>みず</sup>や火<sup>ひ</sup>をつかう仕事<sup>しごと</sup>はできません。犬<sup>いぬ</sup>のさんぽもしません。あとはなんでもできます。

つかうときは、「猫<sup>ねこ</sup>の手<sup>て</sup>」をひざにのせて、つま先<sup>つまさき</sup>にむかつてなでながら、「猫<sup>ねこ</sup>の手<sup>て</sup>、猫<sup>ねこ</sup>の手<sup>て</sup>、○○○○しておくれ」ととなえます。

(注意<sup>ちゅうい</sup>)





● 反対はんたいむきになでてはいけません。

● ひとつ仕事しごとをするたびに、毛けが一本ぽんぬけます。全部ぜんぶぬけたら、もう仕事しごとはできません。

こりやあ、おもしろいや。ぼくは楽たのしくなってきた。持もっていると、なにかいいことあるかもしれない。

ツンツクツン。しばらくわすれていたおなかの反乱はんらんが、またぶりかえしてきた。そうだ、こんなの、おもちゃに決きまっているけれど、ちよつとためししてみよう。このおなかをしずめてもらうんだ。

ぼくはしゃがみこんで、説明書せつめいしょに書かいてあったとおりに、猫の手ねこてをひざにのせた。「つま先つまさきにむかつてなでる」って、よくわからなかったけれど、とにかく足首あしくびのほうから足さきあしにむかつて、指ゆびでこすってみた。

「猫の手ねこて、猫の手ねこて、おなかのいたいの止とめておくれ」

しばらくは——二、三秒びようくらいは、なにもおこらなかつた。それから、ひざがむずむずしてきた。猫ねこのこまかい毛けが、ふるふるふるえている。ひざがツーンと熱あつくなる。ぼくはこわくなって、たちあがりながら、手てで猫ねこの手てをはらい落おとそうとした。そのはずみで、猫ねこの手てはポンとはねあがり、ぼくのおなかにパフンとあたってから、地面じめんに落おちた。

あわててひろいあげたとたん、目めの前まえが暗くらくなった。ガチャンポの機き械かいの電でん氣きが消きえてしまったのだ。いや、機き械かいそのものがあるかどうかもわからないほどの、暗くらやみになっている。

ゾクツと首くびのへんがづめたくなった。ぼくは猫ねこの手てをポケットに入いれると、さっきの公園こうえんへむかって走はしりだした。

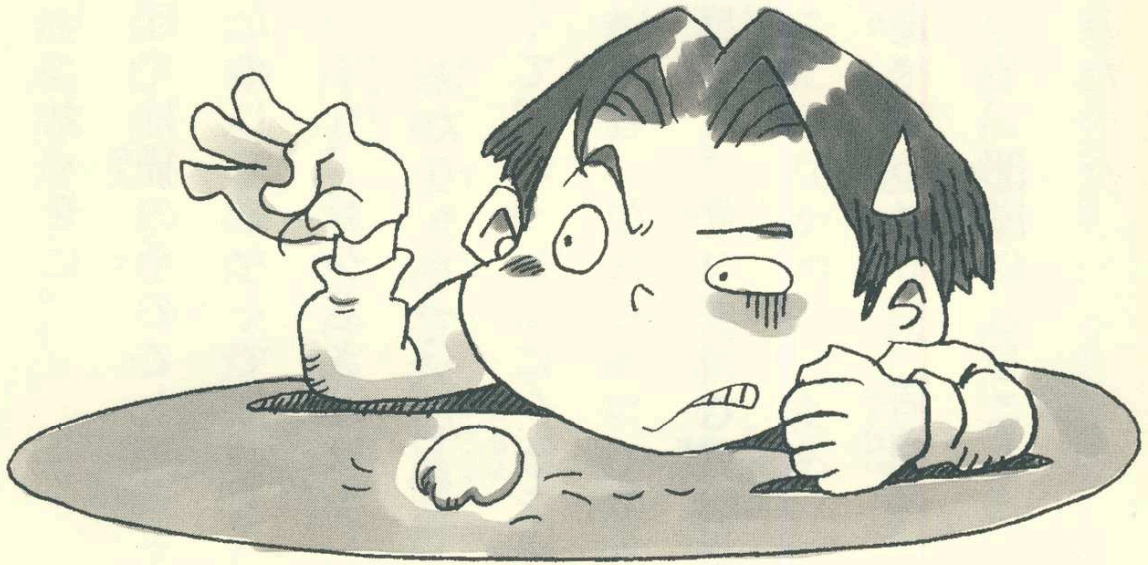
しばらく走はしってから氣きがついた。おなかの反はん乱らんがおさまっている！ 猫ねこの手てがなおしてくれたのか？ さっき猫ねこの手てがおなかにあたったけど、あれっ



て、ぐうぜんだよね？ それとも、猫ねこの手てが自分じぶんではねあがった、とか……。

これって、ほんものだったりして！

### 3 「パーフェクト・アイテム」のぬけ毛<sup>げ</sup>?



息<sup>いき</sup>をきらして、公園<sup>こうえん</sup>のベンチにたどりつくくと、

「リュウ！ リュウちゃん！」

おかあさんが小走<sup>こばし</sup>りでやってきた。

「どこいったの！ 心配<sup>しんぱい</sup>かけて」

「え、だって……」

「いつまで、そこにいるつもり？」

もういいかげんで、反省<sup>はんせい</sup>できたでし

よ。こんどだけはかんべんしてあげ

るから、家<sup>いえ</sup>に入り<sup>はい</sup>なさい」

これって、なんなのさ、おかあさ

ん！ 「もうかえってこなくてい

い」っていったくせに。

でも、ぼくは猫の手のことで、まだドキドキしていた。早く家にもどって、もう一度ためしてみなくては。

家に入っても、おかあさんは少しむつつりしていたが、夕飯のしたくはできていた。ふたりきりで、だまって食べるごはんはまずい。おとうさんは毎日おそくて、いっしょに夕飯を食べられるのは、休みの日だけなのだ。いつもないから、なれちゃっているけれど、こういうときはいてくれたらいいのに、と思う。煮つまって重たくなった空気を、かきまわしてくれたいのに。

夕飯を食べおわって、「宿題と、ジャンプアップと、ピアノの練習するか」といって、部屋にとじこもった。おかあさんの顔が、ようやく少しだけゆるんだみたいだ。

猫の手をポケットからとりだした。そういえば、おなかはすっかりなんともない。これがほんものだっていうなら、漢字を書いてもらいましょう。説明書をもう一度よく読んでみようと思ったが、地面に落としてしまったらしく、どこにもなかった。まあ、いいや、やり方はわかっている。

ぼくは漢字ノートと国語の教科書をひろげ、えんぴつを用意した。猫の手を、さつきとおなじように、ひざにのせて、指先でかるくこすりながらいった。

「猫の手、猫の手、漢字六百個書いておくれ。あ、二学期になつて習った漢字を、一行ずつだからね」

猫の手はほんものだった。もじもじ動いたかと思うと、ぴよんとはねて、えんぴつにぴたつとくつついたのだ。そして、もうれつな勢いで、えんぴつを動かしはじめた。

連続、目標、辞典……むずかしい漢字なのに、猫の手はすいすい書いていく。スピードだつて、ぼくの倍ははやい。

やったぞ！ すばらしい宝物を手に入れたんだ。「パーフェクト・アイテム」だ。仕事一つで毛が一本ぬけるつて？ だいじょうぶ、猫の手はこんなにかまかく、びっしり生えているんだもの。

猫の手の大ふんとうに安心して、ぼくはジャンプアップにとりかかろうと思つたが、やっぱり、まんがの用紙に手がいつてしまう。

ぼくが描いているのは四コマまんがだけど、それぞれがひとつの長いストーリーのなかの話でもある。タイトルは「勇者マー・E・ジャンの旅」。マー・E・ジャンは、「まあ、いいじゃん」といいながら、世のなかのあらゆるいごとを解決していく。へろへろしていて、弱そうなのだが、「真の勇者はこんなものさ」と、にこにこしている。いま、なかなかおりさせようとしてい





るのは、「最悪戦隊ヨゴレンジャー」と「クリーン騎士キチント・キレイ」  
とのあらそいだ。

まんがって、描くのすごく時間がかかる。背景に街を描いたら、場面が  
変わるまでは、どのコマにも街を描いておかなきゃならない。それに、顔の  
表情と手足の動きがむずかしい。ころんだときの手足のかっこう、びつ  
りしたときの表情、練習しなきゃならないことばかりだ。ぼくは学校のプ  
リントや広告の裏にあれこれ描いてみてから、ケント紙に下書きしていく。  
三十分くらいして、カッカッカッときこえていたえんぴつの音がやんだ。  
猫の手を見ると、ノートは四ページ分、角ばった漢字でうまっている。はっ  
きりいって、ぼくより字もうまい。ほんとうに、なんでもできるんだ。  
ピアノはどうだろう。これは無理かもしれぬ。両手をつかわなくちゃな  
らないもの。

ぼくはヤマカワ音楽教室おんがくきょうしつのジュニア・アンサンブル科かというコースに入はいっている。発表会はつぴようかいでは「花はなのワルツ」という曲きょくを、電子オルガンでんし八台だいいちで合奏がっそうする。ひとりでひくわけじゃないので、まだ気きがらくだけど、八人全員にんぜんいんがちがうパートだから、ほかの人ひとをあてにするわけにはいかない。

わかってはいたけれど、ぼくは家いえでほとんど練習れんしゅうしていなかった。ピアノはぼくの部屋へやにあり、電子ピアノでんしだから、音おとを消けして、ヘッドホンをつけてひけば、だれにもきかれない。たくさん練習れんしゅうしたことにもしておける。だから、今回こんかいの曲きょくも、「ちゃんと練習れんしゅうしている。もうひけるよ」と、おかあさんにいってあったのだ。

本番ほんばんまでにはなんとかなるだろう、と思おもっていたけれど、あまかった。右みぎ手てはどうにかひけるようになったけれど、左手ひだりてはまだうまく動うごかない。その左手ひだりての音おとは、ほんとうはむずかしい和音わおんなんだけど、ぼくは和音わおんがにがてな

ので、先生せんせいがかんたんおとな音おとに書きかえてくれたのだ。それでもまだ、鍵盤けんばんの上うえをうろろうしてしまふ。

きのうのレッスンは、最悪さいあくだった。ぼくは曲きょくに入るタイミはいングをのがしてしまい、そのままさいごまで、ぼうつとしていたのだ。発表会前はつひようかいまえのさいごの練習れんしゅうだったので、ぼくよりも橋本先生はしもとせんせいのほうがあせってしまい、「ひやらら、どうひまつひよ」なんて、ふしぎな声こえあげていたつけ。

まずいことに、同じおなクラスで、同じおなマンションの竹原あゆみは、ヤマカワもやっていて、しかも同じおなグループ。発表会はつひようかいでは、ぼくのとなりでひく。なんて運うんが悪いわる！ きのうはあいつにまで、「やっだー、桜井さくらい、練習れんしゅうしといてよ」なんて、いわれてしまった。

竹原たけはらは一言ひとことでいうと、「オバサン」だ。幼稚園ようちえんに入はいったばかりのとき、なき虫むしだったぼくをかばって、「この子こ、すぐないちやうから、いじわるしち

やダメーッ」といわれまくったうらみがある。学校の登校班もずっといっしよで、「桜井、給食着持ってきた？」とか「セキでてるよ」とか、あー、うるさい。体もぼくよりずっと大きく、ごつい声と巨大顔面のおわらいタレント、「俵家どかん」にそっくりだ。

うんざりした気持ちで猫の手をながめていたら、ぽつと、いいことを思いついた。ぼくは右手はできるのだから、左手のパートを猫の手にやってもらえばいいのだ。

それはうまくいった。楽譜をひらいて、猫の手にお願いで、ぼくが右手をひきはじめたら、同時に猫の手は、とびはねて、鍵盤をおしはじめたのだ。ちゃんと、左手のパートをまちがえずにひいている（たぶん、まちがえずにぼくはあっているのか、まちがっているのか、じつは、それもよくわからな

い。九月から練習しているのに、これなんだ）。

ひきおわると、おかあさんがいきなりドアをあけて、パチパチ手をたたいた。そういえば、音を消すのをわすれて、家中に音がひびいていた。

「リュウちゃん、ひけるじゃないの。うまいうまい。なんだ、橋本先生つたら、おおげさなんだから。ほとんどひけてないだなんて」

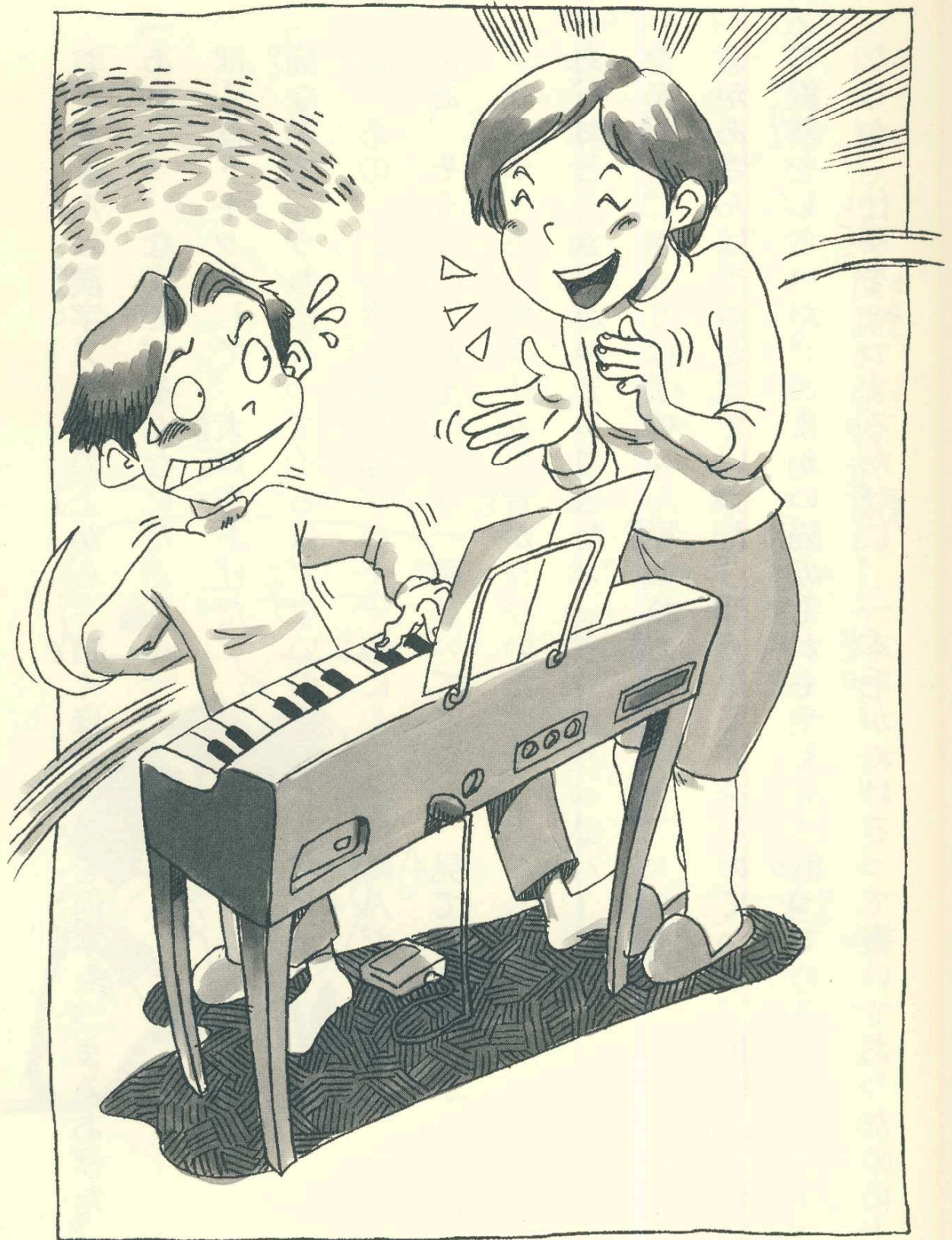
「あ、このあいだのレッスンのときは、ちよつとつまずいちゃっただけなんだよ」

ぼくはあわてて猫の手をかくした。

「ああ、よかった。これでだいじょうぶね。これは？ ああ、宿題ね。ふーん、字、きれいになったね」

おかあさんが漢字ノートをのぞきこむ。

「あれ、これはなに？ 綿ぼこりかな、糸くずかな。動物の毛みたい。猫かな」



おかあさんは漢字ノートの上から、白くほそい毛を何本もつまみあげた。

「あれーっ、なんで、そんなにたくさん」

ぼくはドキツとして、大声をあげた。

「猫なんて、うちに入ってくるはずなのに、ヘンだね」

「あ、あの、さつき公園に猫がいて。服にくつついたんだ、たぶん」

「ああ、そうなの。ねえ、もう一回ひいてごらん。見ててあげるから」

チャンポーン。チャイムの音がひびいた。

「あ、おとうさんがかえってきた」

「なんだあ、きょうはずいぶん早いねえ」

おかあさんはやつとでていった。ぼくはドアをしめてから、机の上とピアノの鍵盤をしらべた。こまかい猫の毛がもやもやと散っている。

たしか、仕事を一つするたびに、一本毛がぬけるって書いてあったのに！

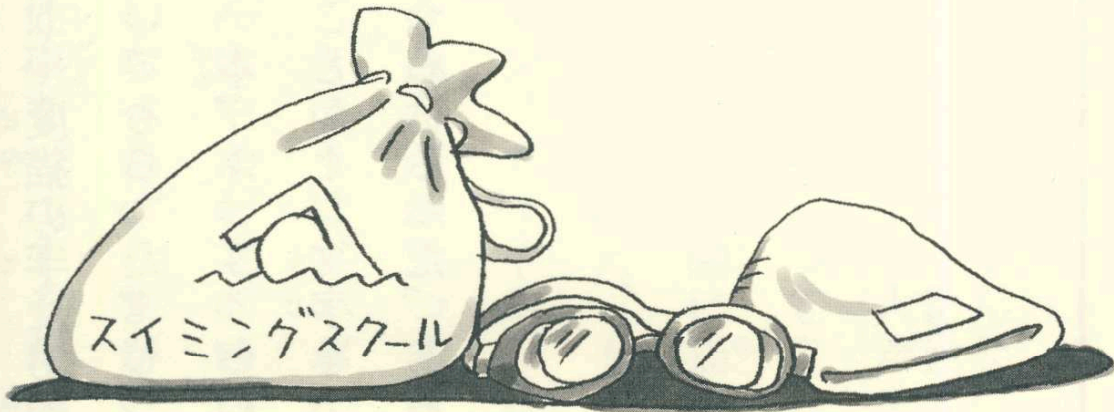
ぼくはもう一度猫の手にお願いして、「ド・レ・ミ・ファ」と、ゆっくりピアノをひいてもらった。じっと見ていると、一つの音がでるたびに、ほそい毛が一本一本、ふっふつとぬけていく。

そういうことか！ 文字を一つ書くたびに、ピアノの音一つだすごとに、毛が一本ずつぬけるんだ。ああ、なんてもったいない！





## 4 スイミングという「仕事」<sup>しごと</sup>



つぎの日は土曜日だ。ざんねんな  
がら、学校はある。奥田先生もいる。  
ぼくは朝のうちに、漢字ノートを、  
先生の机の「提出物入れ」の箱に  
入れておいた。

授業がはじまる前、先生はぼく  
のノートをしらべて、またまたトン  
ガリ声で「桜井くん」とよんだ。

「この漢字、自分で書いたの？」

「えっ……ふあ、ふあい」

あせって、声が裏返ってしまった。

先生はじーっとぼくを見て、

「だれかにやつてもらったんじゃない？」

ぐぐつ。こまった。自分じゃないけど、「だれか」でもない。

「いいえ、その、ぼくが……」

ぼくが猫の手にやらせたんです、とはいえないし……。

返事につまっていると、先生はかたまった粘土みたいな顔で、ピシツといった。

「きようは土曜日か。じゃ、月曜日までに、漢字千二百個。こんどこそ、まじめにやりなさい」

「すつげー、桜井、超大ヒットじゃん」

コースケがひやひやひやとわらう。

休み時間になったら、竹原がとんできて、ぼくの漢字ノートをひったくるようにして開く。

「なによ、これ、ちゃんと書いてあるじゃん。桜井、自分でやったんだよねえ」

「え、え、そりゃ。ほかに、だれがやってくれるっていうのさ」

ぼくはヘドモドしながらこたえた。

「じゃあ、もつとちゃんと、センセにいわなきや。ひどいよ、千二百字なんて。センセ、ぜんぜん桜井のいうこと信じてないじゃん。いまからもう一回、センセにいつてきなよ」

「え、いいよ、もう」

「そうだ、月曜になったら、センセ、ノートしらべるのわすれるかもよ。あのセンセって、自分が生徒にいつけたこと、ときどきわすれちゃうんだから。ひどいよね。助かるときもあるけど」

そう、先生は宿題をだしていたことさえ、わすれてしまうことがある。そ



うなつてくれたらいいのに。

コースケがわりこんでくる。

「よーよー、竹原<sup>たけはら</sup>どかん、やさしーじゃん。もしかして、桜井<sup>さくらい</sup>とラブラブ？」

「うっせーよ、もともとあんたのせいで、こうなつたんでしょうが！」

竹原<sup>たけはら</sup>はいまにも、コースケになぐりかかりそう。

「もう、いいよ、竹原<sup>たけはら</sup>、やめてよ」

ぼくはそれだけいうと、廊下<sup>ろうか</sup>ににげだした。

昼<sup>ひる</sup>に家<sup>いえ</sup>にかえると、だれもいなかった。そういえば、おかあさんもおとうさんも、きょうは仕事<sup>しごと</sup>だつていつていた。おかあさんは二か月<sup>げつ</sup>くらい前<sup>まえ</sup>から、小さい会社<sup>ちいさいかいしゃ</sup>ではたらいていて、ふだんは、ぼくが学校<sup>がっこう</sup>からもどつて三十分<sup>ぶん</sup>く

らいもすれば、かえってくる。

たまに、きょうみたいに、土曜日<sup>どようび</sup>にでていく日<sup>ひ</sup>もある。そういうときは、朝<sup>あさ</sup>から「ごめんね」の連発<sup>れんぱつ</sup>だ。

「ほんと、ごめんね。お昼<sup>ひる</sup>は用意<sup>ようい</sup>しておくから。きょう、スイミングの進<sup>しん</sup>級<sup>きゅう</sup>テストでしょ。見<sup>み</sup>にいけなくてごめんね。がんばってね。五時<sup>ごじ</sup>ごろにはかえってるから。ごめんね」

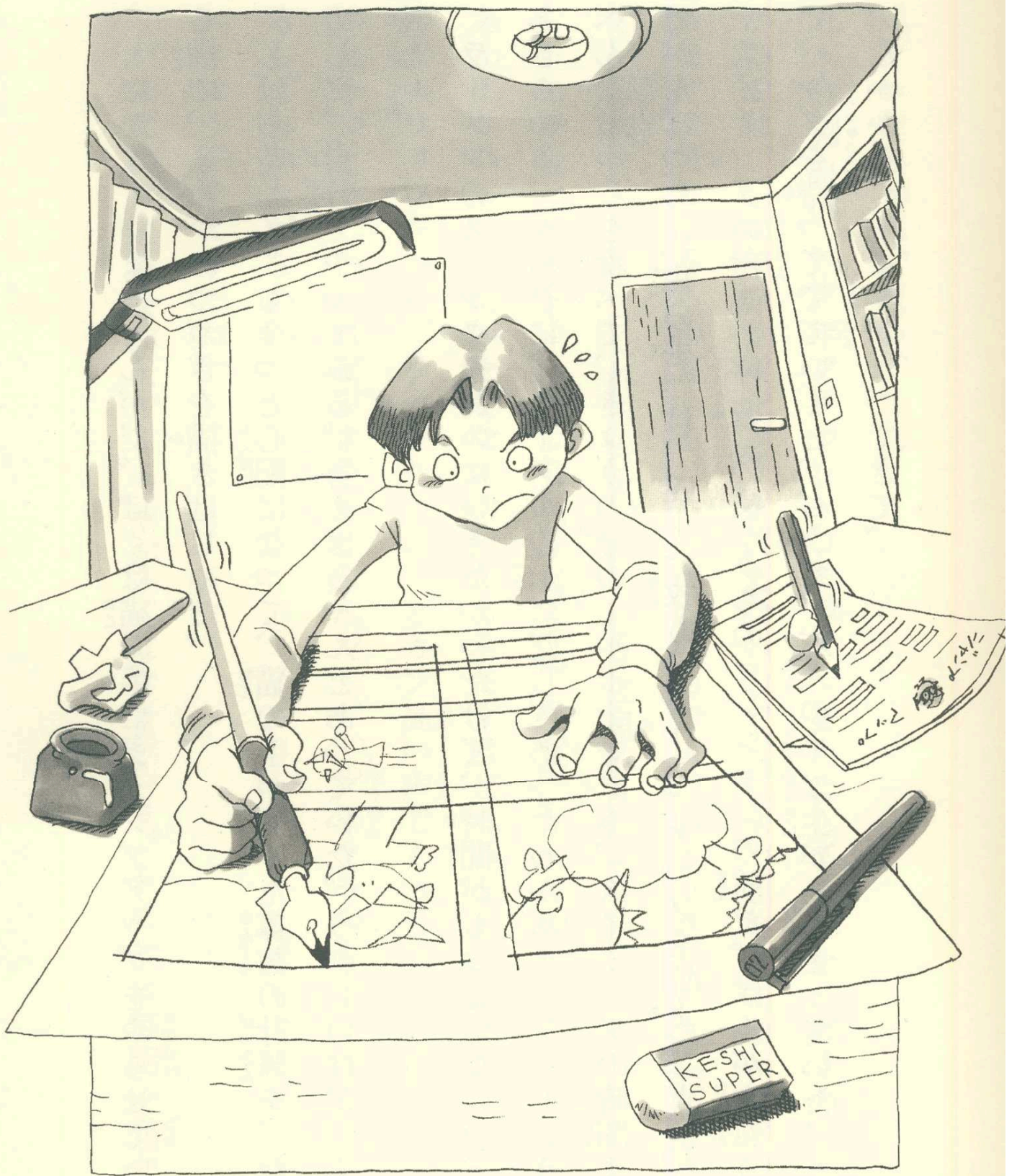
なんで、そんなにあやまるのかなあ？ 子<sup>こ</sup>どもって、親<sup>おや</sup>とか先生<sup>せんせい</sup>とか、とにかくおとなに見<sup>み</sup>てもらおうのが、あたり前<sup>まえ</sup>なんだろうか。

ぼくは家<sup>いえ</sup>のなかがしーんとしているのは、いやじゃない。そういうときは、コンビニで買<sup>か</sup>ってきたラーメンのスナックをぼきぼき食<sup>た</sup>べながら（おなかに悪い<sup>わる</sup>からと、見<sup>み</sup>つかったら、とりあげられる）、じゃんじゃん、まんがのキャラクターを描<sup>か</sup>きちらす。あきると、ゲームをやる。

おかあさんが用意よういしてくれたチャーハンを電子レンジであたためて食べてから、ぼくは、きょうとあしたの計画けいかくをたてた。

きょうはスイミングがあり、バスがくるまで、あと二時間じかん二十三分ぶん。「花はなのワルツ」は、もうオツケーだから、きょうはこれから、まんがを描かく。そのあいだ、猫ねこの手てには、ジャンプアップをやってもらう。毛けがもつたいたいとは思おもうけれど、こう何なん十枚まいもたまっているんじゃない。両方りょうほうとも、あしたのお昼ひるまでに仕上しあげて、ヤマカワの発表会はっぴようかいに行く前まえに、ポストに入いれてくる。これで、まんがのしめきりに間まにあう。

問題は漢字千二百字だ。もう、猫ねこの手てはつかえない。奥田先生おくたせんせいが、字じのちがいを見ぬくとは思おもわなかったな。あした、発表会はっぴようかいからかえってからがんばるしかない。千二百字せんにひゃくじといったら、漢字ノート八ページ分ぶん……。ああ、奥田先生おくたせんせいが、バツ勉強べんきょうのことをわすれてくれますように。





とにかく、いまはまんがだ。ぼくは猫の手にジャンプアップをやらせている横で、まんがのつづきを描きはじめた。

しばらくして、ちよつと心配になつて、猫の手がやった算数の計算を、ためしに、自分でやってみる。答えはちゃんとあつていた。うれしいけど、くやしい。

ラーメンのスナックを買いにいきたかったけど、時間がもつたないので、あきらめる。かわりに、テーブルの上にだしてあつたわかめチップスというへんなおかしを食べて、きょうの分のミルクを飲み、スイミングの時間までがんばった。「猫の手」は、四十一枚ものジャンプアップを仕上げていた。スイミングのバスの停留所は、うちのマンションの前だ。ぼくが大急ぎでバッグを持ってでていくと、もう五、六人の小学生があつまっていた。そのなかから、トモヤがよつてきて、

「リュウちゃん、はい、これ」

と、今週号の「少年フラッシュコミック」をわたしてくれた。ぼくのこづかいでは、「少年フラッシュ」を買えないので、ちよつとなさけないけど、トモヤに貸してもらっている。トモヤのうちでは、おとうさんがまんが好きで、毎週買ってきてくれるのを、いつしよに見るんだそうだ。

トモヤは二年生で、なんとあの竹原あゆみの弟だ。だから、トモヤとはあんまりいつしよにいたくないのだが、トモヤはどういうわけか、しよつちゆう「リュウちゃん、リュウちゃん」とカン高い声でくつついてくる。ちよつとうつとうしいけれど、まだチビなんだし、「少年フラッシュ」の恩もあるし、しかたがないか。

「きよう、テストだね」

バスにのりこみながら、トモヤがにこにこわらう。トモヤは毎回一発で

合格ごうかくしているから、まるでへっちゃらだ。

テストは月つきに一回かいある。うちのスクールはスタートは二〇級きゅうからで、ぼくはいま十四級きゅうにいる。十四級きゅうのテストは、クロールで二十五メートルを泳ぐのだが、ぼくはもう二回かいも落ちおていた。スピードはまあまあだけど、肩かたがへんに大きくあがってしまいうし、息いきつぎのタイミングも悪いわるらしい。

コーチになんども注意ちゅういされているけれど、実際じっさいに泳およぎはじめると、コーチのことばなんて、どこかにすつとんでしまうのだ。足あしがパシパシと水みづを打うつ気持ちきもちよさと、ちよつとした息苦いきぐるしさ、きらきらゆれる水みづと光ひかり、そんなのを感かんじているうちに、いつものプールのかべが目めの前まえにきている。水みづからあがるたびに、コーチに、「さーくーらーいー。まだ悪いわるくせがとれないなあ」なんて、大声おおこえでいわれてしまう。

コーチは筋肉きんにくボコボコの若い男わか おとこの先生せんせいで、ピッチリおしりにくいこむ競きょう

泳用<sup>えいよう</sup>パンツをはいている。休けい<sup>きゅうけい</sup>時間<sup>じかん</sup>なんか目<sup>め</sup>があうと、ニヤツとして、胸<sup>むね</sup>の筋肉<sup>きんにく</sup>をブルンとふるわせたり、腕<sup>うで</sup>に力<sup>ちから</sup>こぶをつくって見<sup>み</sup>せたりする。トモヤなんかはおもしろがって、ペタペタさわりにいく。女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>たちは気<sup>き</sup>持ち悪<sup>わる</sup>そうに目<sup>め</sup>をそらす。ぼくもそうだ。でも、コーチはそんなことには全<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>気<sup>き</sup>がついていない。

ぼくが二か月前<sup>げつまえ</sup>のテストに落<sup>お</sup>ちたとき、おかあさんは「えーっ」とさげび、それから「あーあ」と「ふーっ」というのを、二回<sup>かい</sup>くりかえした。二回<sup>かい</sup>目<sup>め</sup>も落<sup>お</sup>ちたときは、「えーっ」は「ひえーっ」になり、「あーあ」と「ふーっ」のくりかえしは五回<sup>かい</sup>になった。

ぼくはそのときまでは、落<sup>お</sup>ちたことはそんなに気<sup>き</sup>にしていなかったのに、おかあさんのその声<sup>こえ</sup>をきいたら、もつとがっくりしなくちゃいけないような気<sup>き</sup>になってしまった。

そういえば、週三回もかよっていなから、いまだに十四級あたりでぐずぐずしているのは、ぼくくらいなものだ。週一回や週二回のコースの子たちは、けっこうゆっくりあがっているが、週三回の子はみんなさっさと上級のクラスにすすみ、バタフライなんてすごい泳ぎ方をへいきでやってたりするのだ。

だからぼくは、きょうのテストは、なんとしても受かりたかった。といっても、早くバタフライにたどりつきたいわけではない。つぎの級にすすんでしまえば、またしばらく、のんびりやっけていてもめだたないだろう、というだけだ。

いよいよテストがはじまった。順番を待ってならんでいると、ぼくはいつも、いやな気分になる。ドキドキするのはもちろんだけど、それだけじゃない、なにかうんざりした気持ちになるんだ。

たとえば、二階かいの見学者席けんがくしやせきにいつぱいつめかけている、よそのおばさんたち。ふだんでも二〇人にんくらいはいるけれど、テストのときは五〇人にんくらいにふくれあがる。見学者席けんがくしやせきとプールとはガラスで仕切しきられているので、おばさんたちはガラスにはりつくようにして、ぼくたちを見物けんぶつしているのだ。ぼくはいつも、ずっと前まえに見たマリランダのイルカのショーを思いだしてしま  
う。もちろん、ぼくたちがイルカだ。

それから、ファイルとペンを持って、ぼくたちに点数てんすうをつけるコーチ。  
毎月まいつきのことだから、なれてはいるけれど、ときどき、なんでいちいちテスト  
があるんだろう、と思おもってしまふ。

ヤマカワの先生せんせいも、なにかと自分じぶんのノートに書きつけている。ジャンプア  
ップはもちろん、すべてに点てんがつく。学校がっこうはしようがないかもしれないけど、  
でも、そうやって、あらゆるところで点てんをつけるのが、おとなの役目やくめなのか

な。それとも、そんなことを気にするぼくがヘンなのだろうか。

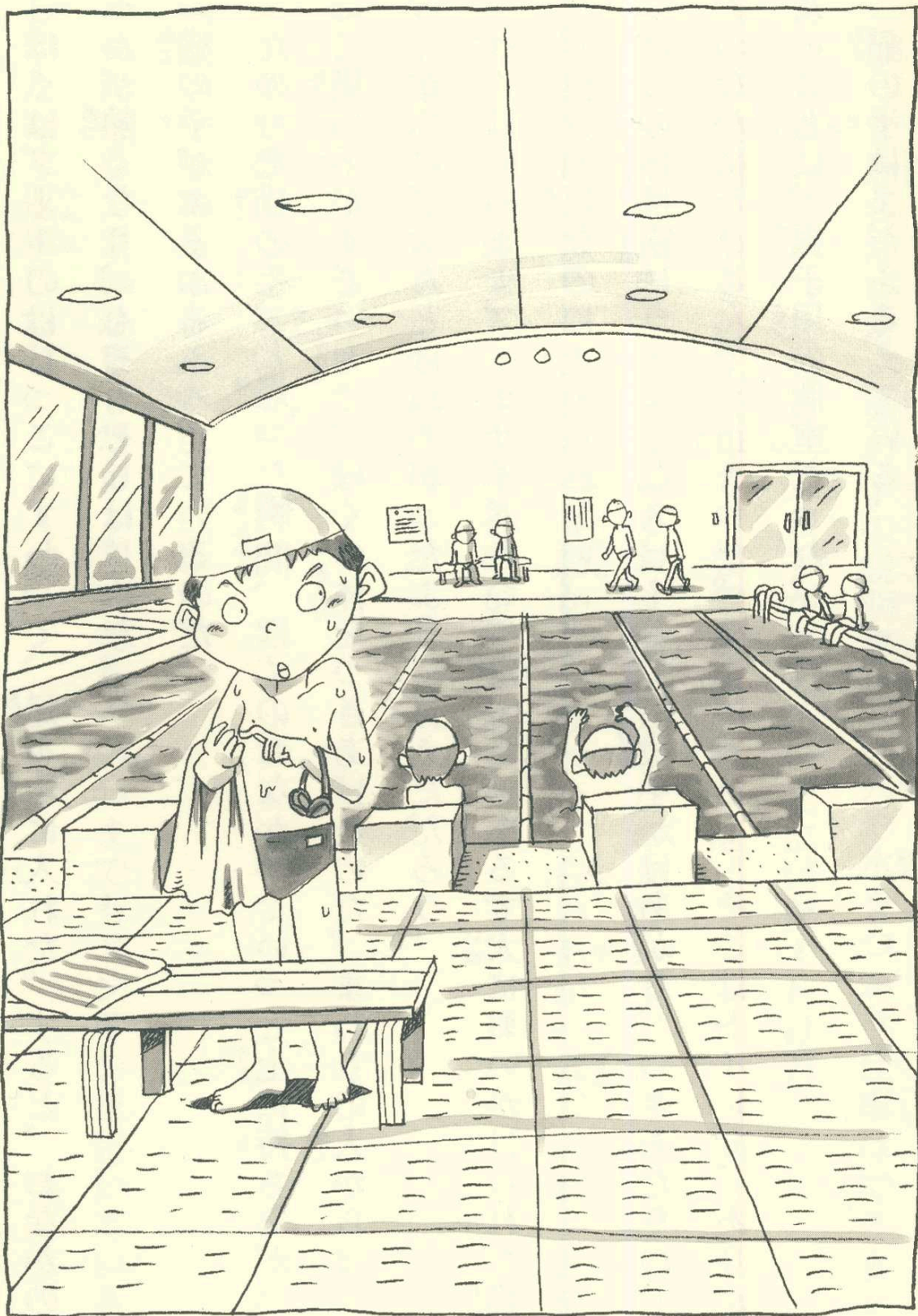
スタートのホイッスルの音がなんどかひびき、ぼくのドキドキが大きくなつた。でもだいじょうぶ、きようは「パーフェクト・アイテム」がある。もちろん「猫の手」だ。タオルにつつんで、ベンチの上においてある。ぼくは自分の番のちよつと前に、耳でもふきにいくようなふりをして、タオルのところにいき、猫の手にお願いした。

「猫の手、猫の手、テストに合格させておくれ」

毛はたいせつにしくちやならないけど、こういうたのみ方なら、一本抜けるだけですむんじゃないかな。

ぼくは猫の手を、水泳パンツのおへその下あたりにすべりこませ、スタート台にむかった。

まだとびこみの練習はしていないから、水に入ってからスタートする。





ぼくはプールののはじっこにすわって、足を水に入れた。すると、おなかのへんが熱くなり、もぞもぞしはじめた。

猫の手がぶるぶるふるえているのだ。

たのむぞ猫の手、と思った瞬間、ぼくのおなかぐいっと上に持ちあがった。猫の手がすごい力で、ぼくの体をつきあげたのだ。まわりの人からは、ぼくが急にびよんとはねあがったように見えただろう。

ぼくはそのままプールサイドをつつ走った。まるで犬においかけられた猫だ。自分の足なのに止められない。

ぼくの体は宙にうくようなスピードで階段をかけあがり、つきあたりのドアのなかにとびこんで、止まった。たすかった！そこはトイレで、ありがたいことに、男子用の個室だった。

猫の手はまだふるえている。

やっと思おもいだした。猫ねこの手ての説明書せつめいしょに、「火ひや水みずをつかう仕事しごとはできません」と書かいてあつたのを。猫ねこの手てがおどろいてにげだすわけだ。

ぼくは猫ねこの手てをとりだして、なでながらいった。

「猫ねこの手て、猫ねこの手て、落おちついておくれ。もうたのまないよ、こんなこと」

猫ねこの手ては、ようやくぴたっと動うごかなくなった。白しろい毛けが一本ぼん、ふわっと飛とんだ。こんなので一本ぼん抜ぬけるのか。やれやれ。

トイレのドアをたたく音おとがした。

「おい、リュウちゃん？」

トモヤの、カン高だかい声こえだ。

「リュウちゃんいるんでしょ、ねえ」

めんどろくさいから、だまっていたら、いつまでもドンドンたたいている。

しかたなく返事へんじした。

「いるよっ。たたくなよ」

「あっ、やっぱり、リュウちゃん、いたね。コーチがさがしてこいって。ぼく、リュウちゃんはきつとおなかがいなくて、トイレにいったと思おもいますっていったの。あたたたでしよ」

あー、うるさい、トモヤ。よりによつて、こんなチビにさがしにこられるなんて。

「リュウちゃんて、すぐおなかがいなくなつて、ンコがでるんでしよ」

「えーっ、なんで知しつてんだよ」

「ぼくんちのママが、リュウちゃんちのおばさんからきいたつて」

げろーっ。おばさんどうしつていうのは、そんなことまで話はなしているのか。

「ぼくは、なかなかでないだよ。それでママは、リュウちゃんと足たして二で割わつたらいいのにねっていつていた。ねえ、もうンコでおわつたあ？ お

なか、よくなつたあ？」

「だいじょうぶだから、もうもどつてよ」

「うん、わかつた。リュウちゃんも早くね。ぼく、もうテスト終おつたよ」  
テストか。いまさら受うけにいくのはイヤだけど、ずっとトイレにこもつてはられない。トモヤの足音あしおとがきこえなくなつてから、ぼくはトイレからでていった。

プールにもどると、コーチの大おお声。

「おーい、さくらいー。はらいたはなおつたか？ ウンピーか？ すごい勢いきおいでトイレにダッシュしてたなあ。おまえ、もう一回かいシャワーあびてこいよ。ケツ、よくあらつてな」

まわりの連中れんちゆうがギャーギャーわめく。

「きつたねえ」

「やっだー」

「おれ、先にテストやってよかったー」

ああ、コーチって、どうして、こういうことを平気でいうのだろう。

かえりのバスがマンションにつくと、おかあさんが入口で待っていた。おかあさんは、いつもわざわざ迎えにでてくる。

「どうだった？」

「——来月、もう一回」

「げっ……。あ、そう」

ぼくはあのあと、テストを受けることは受けたが、やけっぱちの勢いで、水をどかどかけちらすだけだった。落ちついて泳げたら奇跡だ。

おかあさんは、こんどはそれきり、なにもいわなかった。そのかわり、む

つつり攻撃こうげきの夜よるだった。



## 5 「花<sup>はな</sup>め<sup>め</sup>ワ<sup>ワ</sup>ル<sup>ル</sup>ツ」 ふきとぶ



日曜日、ぼくは朝から自分の部屋にこもって、もくもくとまんがを描いた。猫の手も、もくもくとジャンプアップを仕上げている。昼までに、ついにまんが四編は完成し、ジャンプアップも全部クリアできた。

くたびれたけど、今回のまんがは自信作だ。ひよつとして、入選しちゃったりして。小学生で入選なんて、見たことないけど。

猫の手はやせてしまった。毛がずいぶん抜けてしまったからだ。二か

所しょもハゲができて、白しろい布地ぬのじらしいものが見みえている。

猫ねこの手て、もつとたくさんあつたらいいのに……そうだ、買かいにいけばいいんだ。なんで、もつと早はやく、気きがつかかなかつたんだろう。

ぼくは、ジャンプアップ、できあがったから、ポストに入いれてくる、といつてでかけた。

まんがの原稿げんこうとジャンプアップ、二つの封筒ふうとうをポストに入いれたあと、自じ転車てんしゃを飛とばして、あの工場こうじょうのへいがつづく裏道うらみちにいつてみた。太ふとったおじさんがひとり、犬いぬの散歩さんぽをしているだけで、昼間ひるまなのに人通ひととおりは少すくない。へいがとぎれたところには、このあいだと同じおなじように、ポンコツの自じ動販どうはんばい売機きが四、五台だいおいてある。

ガチャンポの機き械かいはどこにも見みつからない。ぼくは自じ動販どうはんばい売機きのあいだをすりぬけるようにして、すみっこまで見みてまわったが、やっぱりなくなつて



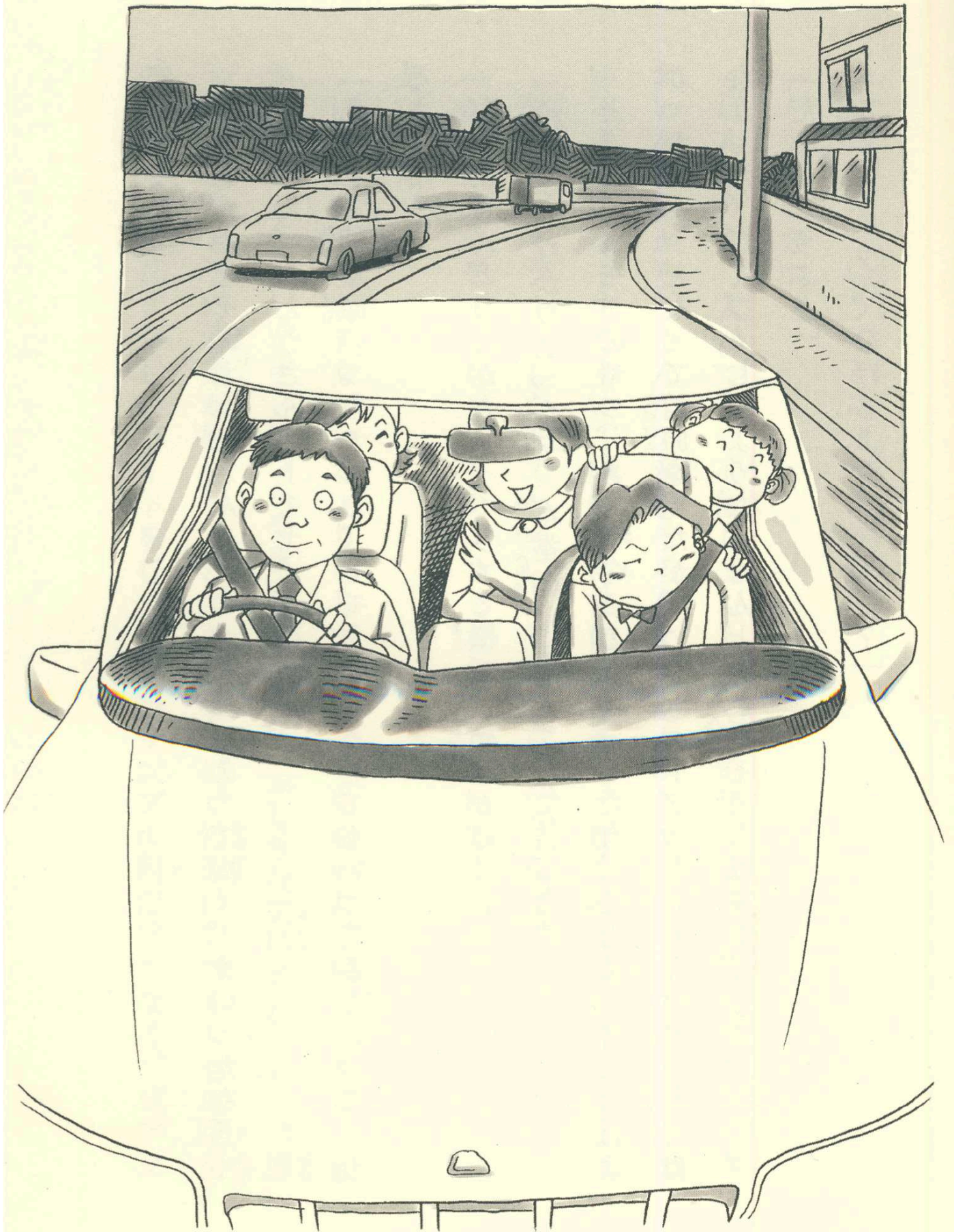
いた。さっきの太ったおじさんが、ヘンな顔をして見ている。犬まで立ち止まって首をかしげているので、ぼくはあきらめて、かえることにした。

どうなっているのだろうか。もう猫の手は手に入らないのだろうか。

それでも、とにかく、きょうの発表会はきりぬけなければ。それから、残った毛をどうつかうか、よく考えてみよう。もつとすごいこと、楽しいことをやってもらわなくちゃ。せつかくの「パーフェクト・アイテム」の宝物だもの。

家にもどると、ぼくは長ズボンにえりのあるシャツに着がえさせられ、ネクタイまでつけさせられた。おかあさんは、ぴらぴらする服に着がえている。おかあさんは、発表会が大好きだ。自分がでるわけじゃないのに、いつも髪の毛までくるくるにして、はりきっている。

それからぼくたちは、おとうさんの運転する車で、会場である市民ホール



にむかった。

竹原あゆみとそのおかあさんも、いっしょにのつていく。まいったな。

「竹原さん、おとうさんとトモヤくんは？」

「ふたりで秋葉原いっちゃった。トモヤがどうしてもいつてみたいって、うるさくて」

おかあさんどうしがおしゃべりする横で、竹原がぼくにいう。

「桜井、おなかなおった？ 本番中にトイレいかないでよ」

ああっ、トモヤのやつ、きのうのことしゃべったな。口どめしておけばよかった。ゲツとなって竹原を見たが、いつものドゲツとしたオバサン顔ではなかった。びくびくしたような、ほんとに心配そうな顔をしている。

「だいじょうぶさ」

「『花のワルツ』、ひけるようになった？」

やつぱり、いうことはオバサンだ。

「バツチシさ」

「ほんとう？ よかった、心配してたんだ。あたし、この曲好きだから。きれいな曲だから、みんなの音がそろろうと、なんかこう、ちがう世界をとんでいるみたいなの、すごーい、いい気持ちになるんだ。わくわくしちゃう」

竹原は、キラキラした顔でわらい、それから、ぼくをまつすぐに見て、

「がんばろうぜ」

といった。

ぼくは窓のそとをながめるふりをして、むこうをむいた。自分でもよくわからない、くやしいようなうらやましいような、ふしぎな気持ちがあった。竹原は、ほんとうに音楽が好きなんだ。そういえば、竹原はいつもソロの部分のある、一番むずかしいパートをひく。アンサンブル科だけでなく、ピアノ

の個人こじんレッスンは受うけているってきいたことがある。

ぼくはヤマカワにかよっているあいだ、「わくわく」したことなく、一度いちどでもあつたらうか。

いままでの発表はっぴようかい会のことだつて、あんまりおぼえていない。ぼくは幼稚ようち園えんのころから習ならっているから、もう五回かいもでたことがあるのに、おわつたときのせいせいした気持きもちちしか思おもいだせない。曲名きょくめいだつてわすれている。

そして、今回こんかいは、ぼくのポケットのなかには、猫ねこの手てがある。これをつかっているかぎり、「わくわく」なんてありつこない。いや、つかわなくたつて、ぼくにそんな気持きもちちになれるときがくるのかな……。

発表はっぴようかい会は、小ちいさい子のグループからはじまった。自分じぶんの出番でばんじゃないときは、客席きやくせきで、おかあさんたちといっしょにいる。すぐに、おとうさんは、いねむりをはじめ。毎晩まいばんおそいから、つかれているのだろう。そのくせ、女おんな



の子のことはよく見ていて、ぼくにこっそり、「いまのピンクのリボンの子、かわいかったな」なんていうんだ。ぼくがそういう話をよろこぶと思ってるのかな。

ぼくのグループは六番目に出番がきた。ぼくは電子オルガンの前にすわってから、猫の手をひぎにのせて、お願いした。

橋本先生がタクトをふりあげ、竹原のソロから演奏がはじまった。なめらかに、すべるような音色がひびき、すぐにほかのパートがくわわって、厚みのある音になっていく。ぼくは右手だけひけばいいから、気がらくだ。左手は、ちよこちよこ動く猫の手の上にかざして、ひいているふりをすればいい。ぼくは自分のパートが休符になるたびに、猫の手を見た。抜けた猫の毛が、ふよふよただよっている。どんどんハゲが広がっていくみたいだ。

「ワーツクショーイ」

とつぜん、超特大のくしゃみが、となりの電子オルガンからきこえた。竹原のくしゃみだ。なんて大きな、オッサンみたいなくしゃみ！

会場から、くすくす、わらい声がきこえてきた。

「ワーツジョーイ、グツシヨオーン！」

竹原のオッサンくしゃみは止まらない。ぼくもついにふきだして、横目で竹原を見た。

竹原はまっ赤な顔をして、くしゃみをつづけている。そのたびに、左手の動きがくずれる。右手がブレる。リズムがくるう。とうとう、竹原の

オルガンの音は、止まってしまった。

会場には、わらい声がさざなみみたいに広がっている。ぼくのグループにも、ふりむいて、竹原をのぞいているやつ、わらっているやつもいる。先生は、目玉がとびでそうな顔つきで、大きくタクトをふって、メンバーを集



させようとしてる。

めろめろにみだれて、なんの曲きょくだかわからなくなってしまうたような演奏えんそうのなかで、ぼくの左手ひだりてのパート、つまり「猫の手ねこて」の音色ねいろだけが、やけにきちつと力強ちからづよく、ホールにひびいている。

さいごのほうになって、ようやく、みんなの気持きもちちがオルガンにもどつて、なんとかまともに演奏えんそうできたが、竹原たけはらのくしやみは止とまらず、手てはついに止とまったままだった。

くすくすわらいのなか、曲きょくがおわった。竹原たけはらはくしやみをひびかせて、かけだしていく。カーテンのかけに、竹原たけはらのおかあさんがティッシュしゅを持って待ち受まけていた。

「アレルギーだわ！ どうして急きゆうに」

「わかん、ないよ、ワーグツション！」



竹原たけはらはないでいた。おかあさんが肩かたをだいて、廊下ろうかにつれだしていった。席せきにもどると、うちのおかあさんのVサインブイ。おとうさんはニカツとわらっている。ひさしぶりに見る、おとうさんのわらい顔がお。

「あゆみちゃんには気の毒どくだけど、リュウが一番いちばんじょうずだったわよ」

「あの子こ、いったいどうしたんだ？」

三人にんで首くびをかしげていると、竹原たけはらのおかあさんがやってきた。

「あもう、先さきにタクシーでかえりますね。あゆみ、くしゃみがひどくて、気き分ぶんが悪わるくなってしまうて」

そのあとのことばをきいて、ぼくは頭あたまをたたかれたみたいになった。

「あの子こ、動物どうぶつの毛けのアレルギーがあるのよ。特に猫ねこの毛けがひどくて。どこかに猫ねこがいたとも思おもえないけどねえ……」

夕方ゆうがた、発表会はつひようかいがおわって、家いえにかえったときには、ぼくはつかれきって、

頭あたまがぼうつとしていた。

はじめて見た、竹原たけはらのなき顔がお。ぼくのせいだったなんて——。あした、学校がっこうであやまろうか。だけど、いったい、どういえばいい？ 猫ねこの手てのことを話はなすわけにはいかないし、いっても信しんじてくれないだろうし。

でも、あやまってきたのは、竹原たけはらのほうだった。

チャイムが鳴なって、でてみると、竹原たけはらがたっている。いまにもなきそうなのに、いっしょうけんめいわらい顔がおをつくって。

「さつきはごめん。あたしのせいで、はちやめちゃ」  
ぼくはあわてていった。

「ちがう、竹原たけはらのせいじゃないよ」

「ありがと。なぐさめてくれちゃって。でもあたし、桜井さくらいクンだけには、ちやんとあやまらなきやと思おもって。『ちゃんと練習れんしゅうしといてよ』とか『がんば

ろうね』とかいっておいて、あたし恥はずかしくって。

桜井さくらいクンのこと、見みなおしたよ。さいごまで、ちゃんとひいていたの、桜井さくらいクンだけだったみたいだね。

ああつ、ざんねん。せつかくの『花はなのワルツ』がだいなし。あんなに練れんしゅう習しゅうしたのに。大だい好すきな曲きょくなのに」

竹原たけはらの目めがまたウルウルしてきた。そんなようす、見みていられない。

「気きにしないでよ、たのむからさ……」

ぼくはそういうのがせいっぱいだった。

その晩ばん、早はやめにベツドにはいったけれど、ぼくはなんだか考かんがえることがた  
くさんあるような気きがして、なかなか眠ねむれなかった。

## 6 かまいたち事件 じけん



竹原たけはらは、つぎの朝あさには、元氣げんきにな  
っていた。登校班とうこうはんの列れつにならびなが  
ら、

「オハヨツ、桜井さくらい！ 月曜日げつようびだよ、  
体育着たいいくぎもつてきた？」

あーあ、すっかり俵家たわらやどかん顔がおの  
オバサンにもどつている。

「桜井さくらい、あたし、来年らいねんの発表会はつぴようかいには  
がんばるから、またいつしよにやろ  
うぜっ」

あつかるいやつ。でも、つぎの発はつ  
表会びようかいだつて？ きいただけで、いま

からにげたくなってしまう。

「ところで、漢字千二百字、どうなった？」

しまったあ！ それがのこっていたつけ。きのうのさわぎで、完全にわすれていた。

ぼくは青くなった。ぼくのその顔を見て、どかんがいう。

「もしかして、センス、またわすれてるかもよ。まだ希望はあるよ」

あつ、その手があった！ わすれているかも、じゃなくて、わすれてもらうんだ。猫の手は、家においていくのが心配で、ズボンのポケットに入れてある。これでいこう。

教室に入ると、コースケがイヒツとわらう。

「よつ、爆発どかん！ きのうの噴火、すごかったなあ」

なんのことがわからず、ぼくと竹原が顔を見あわせると、





「おれ、きのう見みにいったんだぜえ、妹いもうと、でてたから。イヒツ。ターラーラターラーラー、ハックション！」

コースケは「花はなのワルツ」のでだしのところを歌うたって、くしゃみのまねをした。

「竹原たけはらどかん演奏えんそう、鼻水はなみずのワルツ！」

まわりの男子だんしたちが、ガハハツとわらった。それからは大おおさわぎ、「ターラーターラーラー、ハックション」の大合唱だいがっしょうだ。

「うるさーいー！ あんたたちなんか、関係かんけいないだろうっ」

竹原たけはらはがあがあ声ごえでどなったが、ハックションの嵐あらしには、ききめがない。竹原たけはらはまっ赤かな顔かおをして、くちびるをひくひくさせている。

ぼくの口くちから、やめろよ、からかうな！ ということばがでかかった。しかしそのとき、コースケのおきまりのセリフが頭あたまにうかび、ぼくの口くちを

さえぎった。

——よつ、桜井、やっさしーじゃん。もしかして、どかんとラブラブ？

ぼくはコースケのニヤリとした目つきと、竹原のまっ赤なほっぺたを見くらべながら、口をあけたりしめたりするしかなかった。

つぎつぎと教室に入ってくる男子たちは、意味もわからないのに、おもしろがって、「ターラーターラー、ハックション」の合唱にくわわっていく。

ぼくの手がズボンのポケットにのびた。ぼくはうしろをむいて、猫の手をひざにのせてこすった。

「猫の手、猫の手、さわいでいるやつらをやっつけておくれ！」

猫の手はパシュツととんでいった。ほとんど目に止まらないようなスピードだ。

「いてっ」

「あれ、いまの、なんだ？」

「だれだよ、ひっかくな」

「わー、オレもなんかいたいぞ」

コースケたちがはじから順じゆんに、首くびのうしろやほっぺたや、足あしのうしろがわに手てをあてていく。

「あっ、血ちだあ」

首くびのうしろをさわっていたコースケが、手てのひらについた血ちを見て、ひめいをあげる。十人にんほどの体からだのあちこちに、一か所しよずつ、二センチほどの赤あかい線せんのような傷きずができているのだ。

クラス中じゆうちゆうがびっくりして、しんと静しずまった。するところんどは、廊下ろうかでさわいでいたとなりのクラスの女子じよしのあいだに、ひめいがあがった。



「キヤツ、いたつ」

「やっだー、なによ」

「だあれ、ひどーい」

ひめいはつぎつぎと廊下ろうかの先さきへのびていき、おそろしいことに、昇降口しょうこうぐちから校庭こうていにまで広ひろがっていく。大声おおこえで歌うたを歌うたっていた二年生ねんせいや、きやあきやあいいながらミニバスケットをやっていた六年生ねんせい、ころんでないでいた一年生ねんせいにまで……。

「先生せんせい、先生せんせい！」

だれかが大声おおこえで職員室しよくいんしつに走はしる。その子この首くびすじにも、シユツと赤あかい線せんがつく。

低学年ていがくねんの子こたちになきわめく。先生せんせいたちがばんそうこうを持もって走はしりまわる。

校内放送で、「みなさん、落ちついて教室に入ってください。静かにするように」というアナウンスが入る。

ようやく、傷のできた子全部にばんそうこうがはられ、みんな教室の自分の席におさまったころ、ぼくのうしろで、スコスコとかすかな音がした。猫の手が地面をはつてもどってきたのだ。ぼくはケシゴムでもひろうようなふりをして、猫の手をひろいあげ、ポケットにしまった。

傷ができた子は全校で七十八人、先生も三人。そのなかには、奥田先生もまじっていた。先生は、「やだ……なに、これ。ねえ、なんなのよ、ねえつたら。もう、やだー」と、涙でグシヤグシヤの顔でいっつづけていた、という。校医の先生がよばれた。保健所の人や、なんと警察までやってきて、あれこれしらべていった。傷を受けた人は、悪いバイキンや毒がついているかもしれない、というので、全員が病院へ行って、検査を受けさせられた。

でも、なにが起おこったのか、もちろん、だれにもわからなかった。わかつたのは、どの傷きずもあさく、すぐなおるだろうということ、悪いわるバイキンや毒どくはついていない、ということだった。

そして、傷きずは、小さい動物どうぶつのつめにひっかかれたあとによく似にている、ということ。

「たたりだー！」

「ちがうよ、かまいたちだよ。人ひとの体からだに切り傷きずなんかをつけていく妖怪ようかいだよ。まんがにでてきた」

「そのまんが、あたしも見みたけど、おとうさんが、かまいたちって、ちいぢやい竜巻たつまきのせいだっていったよ」

「竜巻たつまきって、風かぜのうずまきみたいなもんだろ。そんなんで傷きずができるの？」  
みんな、あちこちでワーワーしゃべっていたが、やがて校長先生こうちょうせんせいが各かくクラ

スをまわってきて、

「ちよつとした事故で、原因をしらべているところです。もうこの話をするのはやめて、落ちついて、勉強にもどりましょう。約束ですよ」と、しんけんな顔で話していく。

ぼくは下をむいたまま、どうしよう、どうしよう、といいつづけていた。

奥田先生は病院にいったままかえってこない。ぼくのバツ勉強のことはバ  
レずにすんだ。ラッキー、といえはいえる。ぼくは猫の手に「奥田先生に漢  
字のことわすれさせておくれ」とたのむつもりだったから。でも、気分はど  
ん底だった。

家にたどりついて、ぼくはベッドにバフンと体を投げだした。頭のなか  
グワングワン鳴っている。なんでこんなことになるのだろう。猫の手を取り  
だしてみた。毛はたったの四本しか残っていなかった！



たいへんだ、あとなにつかうか、よく考えなければ。新しいゲームをだしてもらおうか。いや、それなら、お金をだしてもらえばいい。でも、おかあさんに「なんでお金をそんなにもっているの」なんて気がつかれてしまうから、けつきよく、なにも買えないかもしれない。

四コマまんがスクールで入選させてもらおうか。でも、自分の力じゃないから、うれしくはないし。

ぼくはあれこれ考えていたが、どうしてもこれだ、ということ考えつかない。

それに、考えようとすると、ここ何日かのさわぎが頭のなかを駆けまわつてしまうのだ。粘土顔の奥田先生のトンガリ声。生き恥さらしのスイミング。コースケの手のひらについた血。竹原のくしゃみと客席のわらい声。なんでこうなるんだ、とぼくは何度目かにつぶやいた。

それはぼくが、コースケに「やめろ」っていえなかったから。ピアノの練習しゅうが間まにあわなかったから。まんがにハマっていたから。やるが多おほすぎたから。だから「猫ねこの手て」をつかってしまったんだ。

だいたい、なんでぼくは発表会はつぴようかいにでるのだろう。竹原たけはらは、「来年らいねんはがんばるぞー」なんていってたけど、ぼくはそんな気持ちきもちは、それこそ猫ねこのヒゲ一本ほんの重さおもも持もっていない。

なぜだろう。そう、かんたんなことだ、ピアノ、好きすじゃないんだ。きつとむいていないんだ。いまになって、やっとわかった。なぜはじめたんだろう。それに、スイミングやジャンプアップも。

ぼく、自分じぶんからやりたいっていったっけ？

ぼくはいつしようにけんめい、思おもいだそうとした。幼稚園ようちえんのころや一年生ねんせいのころのことを。

おかあさんが、「やりたい？」って、にっこりわらっていう。「よその子もみんな、そろそろはじめるよ。楽しいわよーっ」

ぼくはきいてみる。

「楽しい？ ぼくにできる？」

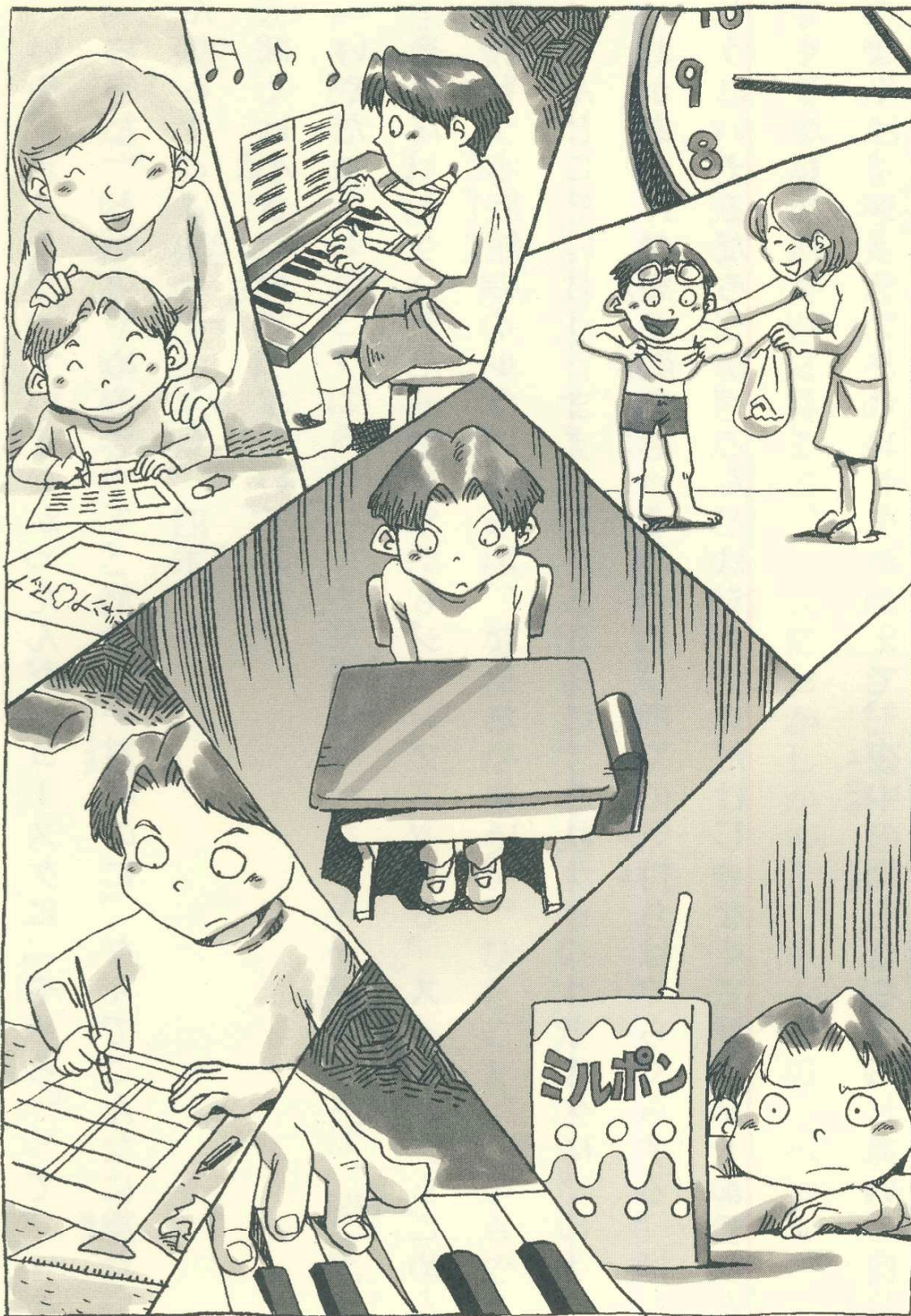
「とーっても、楽しいわよっ。リュウちゃんにぴったり。きつと、すごくよ  
くできるわよ」

「うん、じゃあ、いいよ」

——これだ、このパターンだ。

なぜ「うん」ばかりいつてきたんだろう。なぜ「いやだ」っていわなかつ  
たんだろう。小さいころのことだから？ たしかにそうだ。あのころはまだ  
ほんとうに小さくて、わかっていなかったからだ。

いまならいえるだろうか？



いや、きょうだつていえなかつたんだ。コースケに「やめろ」つて。「いやだ」とか「やめろ」つて、たった一言ひとことなのに、なんでこんなに重たいおもんだらう。

ぼくは小さい声こえでつぶやいてみた。

「いやだ」

そうだ、もういやだ。ヤマカワもジャンプアップも、スイミングもごめんだ。もう水族館すいぞくかんのイルカになんか、なりたくない。

こんどこそいおう、まず、おかあさんに。それから、コースケに。

おかあさんの怒り顔いかがおを思おもうかべる。ぼくの気持ちきもちはぐらぐらする。ほんとうにいえるだらうか。こんどはシユラフだけじゃなくて、テントまでとんでくるかもしれぬ……。

ぼくは、シユラフとテントをかかえて、夜中よなかの街まちをうろうろしている自分じぶん

のすがたを考えた。そのかつこうは、さびしいとか、心ぼそいとかいうより、ギャグまんがみたいに見えて、ヘンにおかしかった。そんなの、へっちゃらさ、という気までしてきた。この前一回やって、ちよつと度胸がついたのかもしれない。きつとなれちゃえばいいんだ。

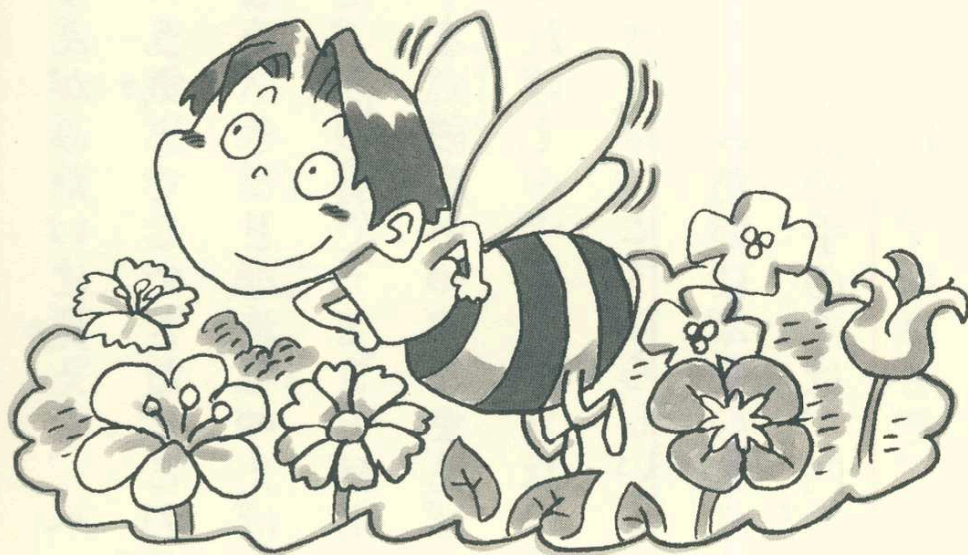
そうだ、「いやだ」ってことばも、いままであんまりいったことがないような気がする。一度いってしまえば、なれるだろうか。ひとこと、口からでてきさえすれば……。ひとことだけ。

そのとき、ぱつとすばらしいことを思いついた。まんがでいえば、頭に「電気がついた」みたいに。

残っている猫の手の毛は、四本。

そうだ。いける、いけるぞ、これで。

## 7 ひみつは「蜜みつの味あじ」



しばらくして、おかあさんが仕事しごとからかえってきて、ぼくの部屋へやをのぞくなり、さけび声こゑをあげた。

「わわーっ、なんでリュウがいるの！」

「え、ぼくがいたらへん？ ん？」

あーっ

スイミングの日ひなのに、コロツとわすれていた！

「やだーっ、リュウ、いまからでもいきなさいよ。自転車じてんしゃとばせば、十分ぶんでつくから。ほら、バッグ。自転じてん

車しゃのカギ持もって」

「え、だって。だって、いまからいったって、十分ぶんくらいしか泳およげない」

「なにいつてんの。それでもベストをつくしなさいっ。さあ、早はやく！ 自分じぶんが悪わるいんだから」

「え、でも、でも」

「ほらほら、早はやく」

ぼくは背せ中なかをおされて、玄関げんかんへと歩あるかされた。いやだ、いやだ、と頭あたまはいいつづけているのに、足あしは動うごいてしまう。口くちからでるのは、「でも、でも」ばかり。

なんでこうなるの？ あの作戦さくせんはどうする？

「さ、ほら。靴くつはいて」

靴くつに足あしをつつこんでたら、靴くつひもに引ひつかかってよろけ、玄関げんかんにしりもち



をついてしまった。

そうだ、いまだ！ ぼくはポケットから猫の手をとりだして、ひざの上にのせた。指先でなでながら、ささやいた。

「猫の手、猫の手、『やめる』っていわせておくれ」

つぎの瞬間、ぼくの口が、なにかの力で大きくあけられ、のどがぎゅつとおされて、声がでた。

「や・る・ぞ！」

「よし、その意気、ガッツでいこう！」

おかあさんはぼくの背中をポオンとたたいた。ぼくはなにがなんだかわからないまま、玄関をでた。

なにが起こったんだらう。ぼくの頭はポツポツとゆげがでそうだ。とにかく自転車をひっぱりだして、どこかへ走りださなければ。

「気をつけてね！」

という声に、上を見あげると、三階のぼくの家窓から、おかあさんが手をふっている。見はらないでよ、おかあさん。

とりあえず、スイミングスクールの方向へ走りだす。とちゅうのショッピ  
ングセンターで自転車を止め、入口の前にあるベンチで猫の手をとりだして、  
よくながめた。

なぜ、ちゃんと「やめる」っていつてくれなかったんだ？ せっかく考え  
た作戦なのに。こんなもの、投げすててやろうか。

猫の手に残っている毛は、たった一本。

「や・る・ぞ」で三本つかってしまったのだ。毛は手のまんなかへんに、さ  
びしくそよいでいる。やっぱり、すてるわけにはいかない。

猫の手をひぎにのせているうちに、なぜ失敗したのか気がついた。反対だ

つたのだ、猫の手をなでるむきが。たしか、つま先にむかってなでること、となっていたのに、きつきはあわてて、逆にしてしまったらしい。それで、「やめる」の反対のことばになってしまったのだ、きつと。

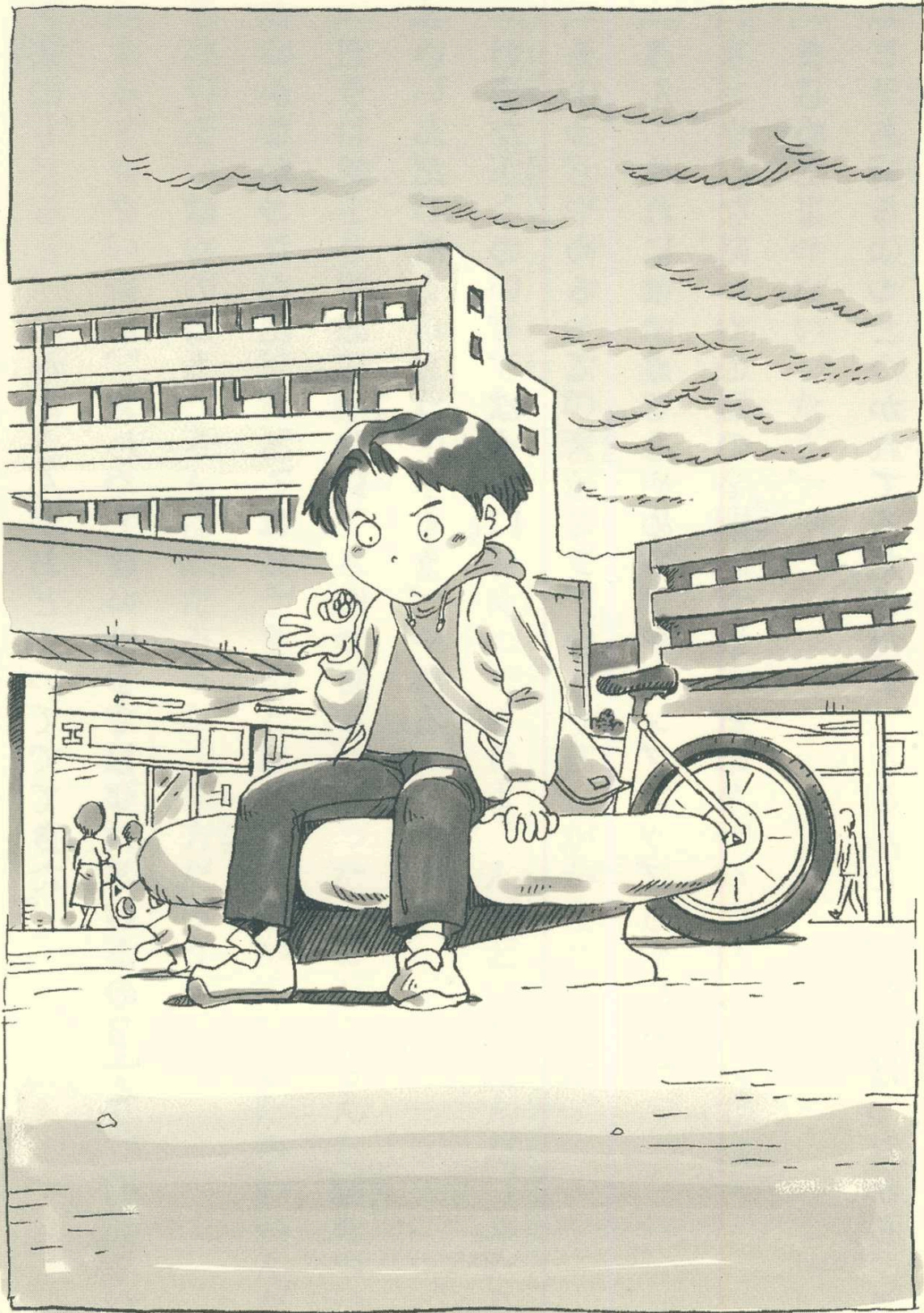
ぼくはがつくりはきたけれど、だんだん、おかしくなってきた。猫の手つて、けつきよくは、いつだって、あてにならないじゃないか。「パーフェクト・アイテム」だなんて、とんでもない。

そういえば、「猫の手もかりたい」って、なんの役にもたたない猫でいいから、てつだってほしくらいにいそがしい、って意味だったっけ。

そんな猫の手なんか、負けていられないぞ。だって、ぼくには「手」だけじゃない、頭も心も、もちろん口だってあるんだから。

ぼくは、いきおいよくたちあがった。

さあ、こんどこそ！



家にもどると、おかあさんがおどろいてでてきた。

「スイミング、まだ、おわってないはずでしょ。どしたの？」

いけ！ ぼくの口くち！

「いかなかったんだ、スイミング」

「どうして！ だめじゃない、さぼっちゃ」

「いいんだ、ぼく、もう……もう、やめる」

いえた！ いいぞ、ぼくの口くち。

「えーっ、やめるって、スイミングを？」

「うん。それにヤマカワもやめる。ジャンプアップもやめる」

「リュウ、なにいつてんの？ ふざけてるの？」

「まじめだよっ」

「じゃあ、ちよつとつかれてるだけだよ。ここんところ、がんばったから。き

よう早く寝るのよ」

「そんなんじゃないったら」

「きようは、リュウの好きな卵コロッケだから、いっぱい食べてね」

「あー、もう、おかあさんってば！」

そのとき、チャイムの音がして、おとうさんがかえってきた。

「仕事で近くまできてたから、かえってきたよ。ん、どうしたんだ、ふたりとも。こんなところにたっただまま」

ぼくはおとうさんの顔を見て、あせってしまった。おかあさんと話を付けるかくごはしていたけれど、おとうさんとは、どうやって話したらいいんだろう。だいたい、おとうさんは敵だろうか、味方だろうか。

「なんでもないのよ。リュウ、ちよつとくたびれているらしくて、ただこねてるの」

「ほう、めずらしいな」

「ダダコネテル？ それじゃ、赤ちゃんじゃないか！ そんなあつかいってあるもんか。」

「ちがうよ！ ぼくはもういそがしいの、イヤなんだ。ほんとに、スイミングも、ジャンプアップもヤマカワもやめる」

「と、いつてるわけよ」

「おかあさんは、おとうさんにむかって肩をすくめた。」

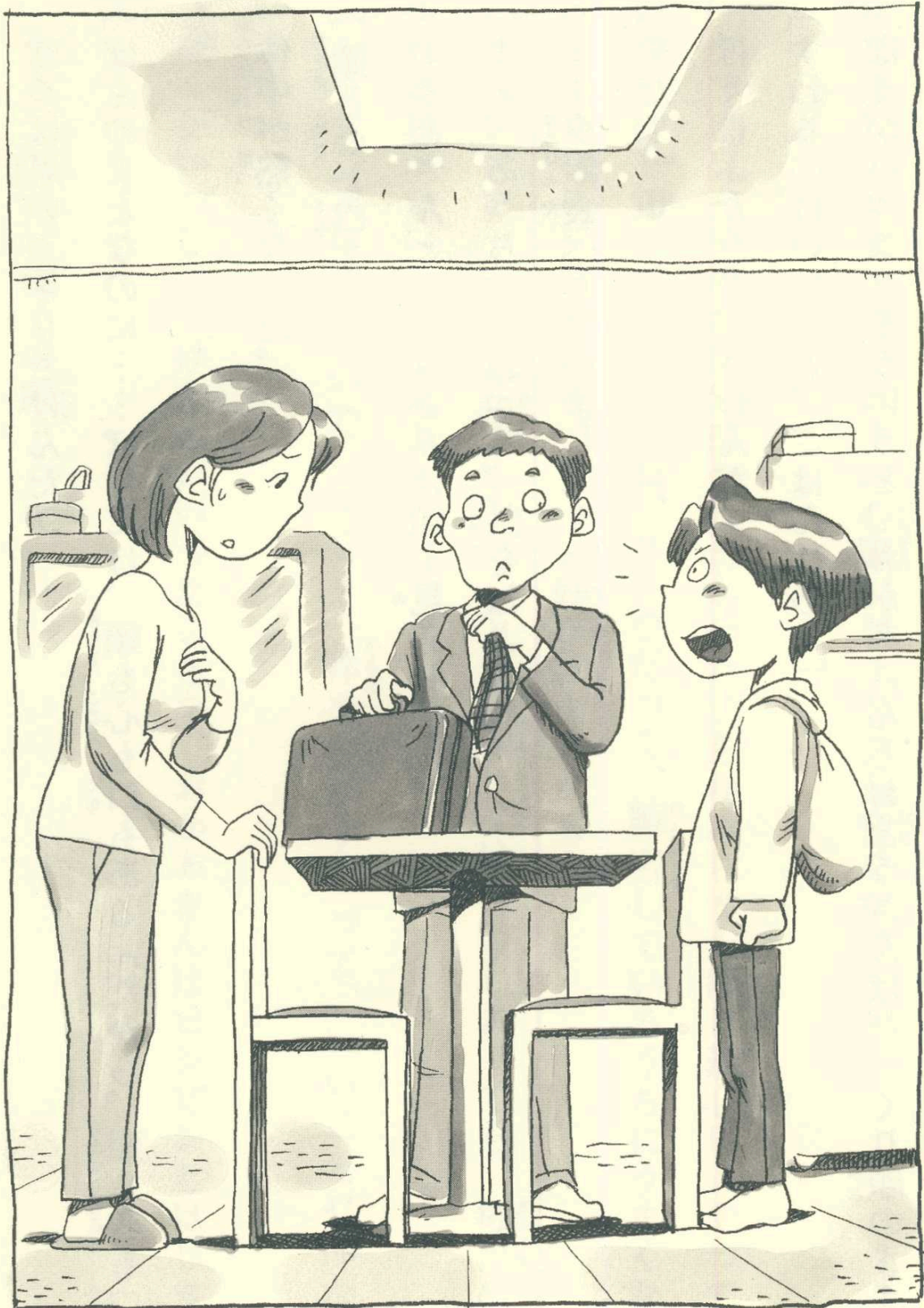
「ふーん、一時的にいやになっただけだろう」

「そうよね。いままでなんでもキチンとしてた子だし。今晚、よく休めば、

元気になると思ってる」

「そんなところだろう」

「ふたりでかかって決めるなよっ」





ぼくは思おもいつきりさけんだ。

「ぼくのことなのに……ぼくには、頭あたまも心こころも口くちもあるんだから。頭あたまも心こころも口くちも」

からだじゅうあつ  
体中からだじゅうが熱あつくなった。

「頭あたまと心こころと口くち?」

おかあさんとおとうさんは顔かおを見みあわせた。

「まあ、あっちですわって、話はなしをしようや」

「まず夕飯ゆうはん食べちゃいましょう」

「やだ！」

ぼくはふたたび、さけんだ。

「すわるのはいいけど、ごはんはあと」

ぼくがパツシリそういうと、おかあさんとおとうさんはびっくり顔かおのまま、

かたまってしまった。ぼくの心臓しんぞうがドクドクと音おとをたてた。

「ヤマカワをやめたい気持ちきもちはわかった。あゆみちゃんほど熱心ねっしんにはやっ  
ていないのも知しってる。でもね、リュウだって、練習れんしゅうしているうちにうまくな  
るでしょうし、そしたら、もっと好きすになるかもよ」

「ジャンプアップは勉強べんきょうだもん、そりゃ楽しくはないわよ。でも、毎日まいにちの  
積み重ねかさがたいせつなのよ」

「スイミングは楽たのしいでしょう？ 体からだを動かうごかすのって、いいことじゃな  
い？」

ぼくがいつしようにけんめい言ったことを、おかあさんはピシピシとはじき  
返かえしていく。

回まわれ、回まわれ、ぼくの頭あたま！

「だけど、そういうの全部ぜんぶやってたら、時間じかんがないんだ。学校がっこうの宿題しゅくだいだってあるし」

「そんなにいそがしくはないでしょ。塾じゅくにいつてるわけじゃないんだから」

「ううん、ほんとに時間じかんがないんだよ」

「時間じかんって、なんの時間じかんだ？ ほかにやることあるのか？」

おとうさんにつっこまれて、ぼくはグツとつまってしまった。まんがのこ  
とだけは、どうしてもひみつにしておきたい。ふんばれ、ぼくの心こころ。

「やりたいことはある。でもいえない」

ぼくはおなかに力ちからを入れて、大きな声こえでいった。

「いえないって？ そんなの、話はなしになんないわよ。いったいなんなの？」

おかあさんの顔かおがひきつっている。

「だめ、ひみつだもん。でも、悪いことじゃないよ」

「悪いことじゃないから、いえるでしょ。かくしごとなんて、とんでもない  
っ」

おとうさんがとつぜん、

「ふーむーう」

と、ぼーっとした声こえでうなつた。

「かくしごとかあ……ひみつかあ」

遠くとおを見ているみような目めになっている。

「いいなあ、ひみつ。リュウのひみつかあ」

「ちよっと、おとうさん、どうしちやったのよ」

「いや、ひみつって、蜜みつなんだよ、蜜みつ。ないしよだから、あまくて、すてきな  
のさ」

「やだ、おとうさん！ すてきだなんて。おとうさんまでかくしごとしてる

んじゃないでしょうね」

「ち、ちがうよ。でもさ、悪くないひみつだったら、いいんじゃないか？」

「ほーらほら、どうもあやしい。なにがあるっていうの？」

ぼくは口をぽかんとあけたまま、ふたりのいいあいを見ていた。

それにしても、おとうさんがこんなことをいうなんて、おどろきだ。おとなの男のひとが、蜜とか、あまくて、すてきとかいうのって、似合わなくて、ヘンな感じがする。

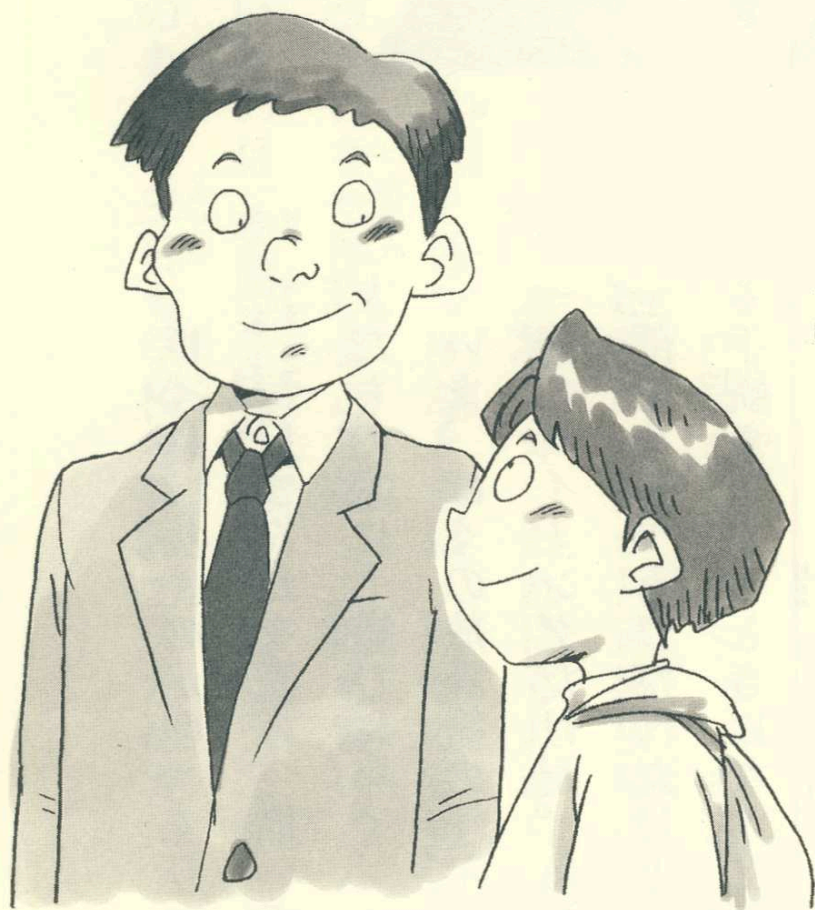
おとうさんにひみつがあるのかどうか、ぼくにはわからない。でも、こう思った。おとうさんも、ひみつを持ちたいのかもしれない。もしかして、おとうさんも、ぼくと同じような気持ちになるときがあるのかも。おとうさんはサラリーマンで、いつもいつもいそがしそうだ。「営業成績がのびなくつてさ」とか、「あしたも休日出勤か」とか、おかあさんにときどきぼやいて

いるもの。

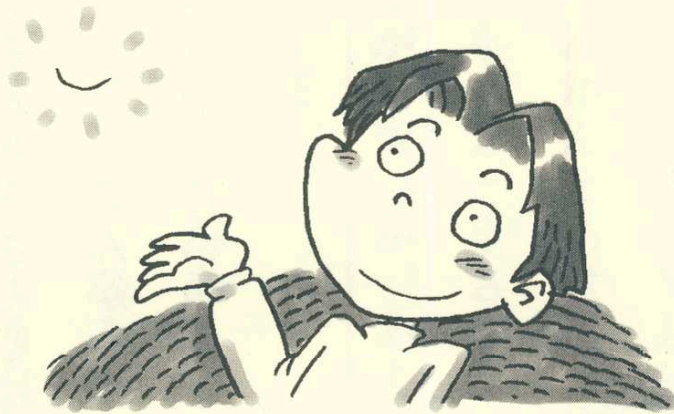
ちよつと赤あかくなりながら「ひみつ」についてしゃべっているおとうさんは、  
ぼくの知しってるおとうさんとはちがうひとみたいだった。

さいごに、おとうさんがいった。

「信しんじてやろうや。こいつ、しんけんだぜ」



## 8 さらば、猫の手<sup>ねこて</sup>



ぼくは、歩くのがゆっくりになつた。毎日まんがを読み、描いている。友だちの家にも遊びに行く。

いま、ぼくの放課後の予定は、週一回のスイミングだけだ。はじめは全部やめるつもりだったけど、やめる手続きをするときになって気がついた。ぼくは泳ぐのはけっこう好きだつてことに。

進級テストや筋肉ボコボココーチ、うんざりすることはあるけれど、ま、いつか、という気になったのだ。

それで週しゅう一回かいのコースに変更へんこうして、のんびりとやっている。

ついでに、「おなかがいい」というミルポンも、やめた。「飲のんでも、ちつともよくなる。ぼくはもう飲のまないからね」といって、その後ご一回かいも飲のんでいない。でも、おなかは快調かいちょうだ。おなかいたって、いそがしすぎるとなるのかもしれないな。

ぼくの「勇者ゆうしゃマー・E・ジャンの旅たび」は「少年しょうねんフラッシュ」の四コマまんがスクールに名前なまえがのった。もちろん、ただの「三か月連続投稿げつれんぞくとうこうの人ひと」のらんで、とつても小ちいさな活字かつじだったから、おそらく、だれにもわからないだろう。でも、本ほんのページに自分じぶんの名前なまえを見みつけたときは、たしかに蜜みつの味あじがした。ぼくは一か月分げつぶんのおこづかいを全ぜん部ぶつぎこんで、二冊さつも買かいこんだ。

ぼくの心こころにひっかかっていたのは、奥田おくた先生せんせいと漢字千二百個かんじせんせいのことだ。先生せんせいはあの「かまいたち事件じけん」のあと、三日みっかも学校がっこうを休やすんでいたのだ。



ほかの子たちの傷は、一日か二日くらいで、きれいになおってしまった。すると、あの事件そのものが、夢のなかのこのように思えてきたらしく、しばらくすると、その話もでなくなった。ぼくは心からほっとした。

でも、奥田先生はひどいショックを受けたらしい。うわさでは、先生は、あのさわぎが自分のクラスからはじまったことを知って、自分がなにかにた  
たられている、と思ひこんだ。それで神経症になり、学校にこられなかつた、ということだ。まあ、うわさの元がコースケだから、ほんとうかどうかはわからない。

四日目に学校にでてきたときは、いつもの粘土顔になっていたが、シヤレもいわないし、わらい顔はますます少なくなっていた。でも、なぜかバツ勉強はいつさいださなくなった。

ぼくの漢字のことも、なんにもいわなかった。



それでも、ぼくはちゃんと千二百字を書いた。あの事件で一番ダメージを受けたのは先生かもしれない。そのつぐないの気持ちだ。

そして、はじめをつけなくちゃ、という思いもある。書き終わったときは、もう一生漢字はごめんだ、という気になったが、すっきりした。先生、「無実の罪」を着せられたら、こんどは、ちゃんと抗議するからね。

漢字を書き終わったつぎの日、コースケとけんかをした。ぼくが女の子のえんぴつをひろってやっただけで、「桜井、ラブラブだ」なんて、うるさくいいつづけるから、どなってやった。

「やめろ、おまえなんかくだらねえ」

コースケはびっくり顔で、

「なんだ、きどるなよ、このクソチビ！」

取っ組みあいになりかけたところで、竹原にとめられてしまったけれど、

コースケはあとで「あいつ、けっこうこわいよー」なんて、いつていたそう  
だ。

その夜、ぼくは引きだしの奥にしまつてあつた猫の手をとりだした。さい  
ごの一本の毛のつかい道は、もう決めてあつた。

「猫の手の新しいのを、持つてきておくれ」

そういうつもりだった。

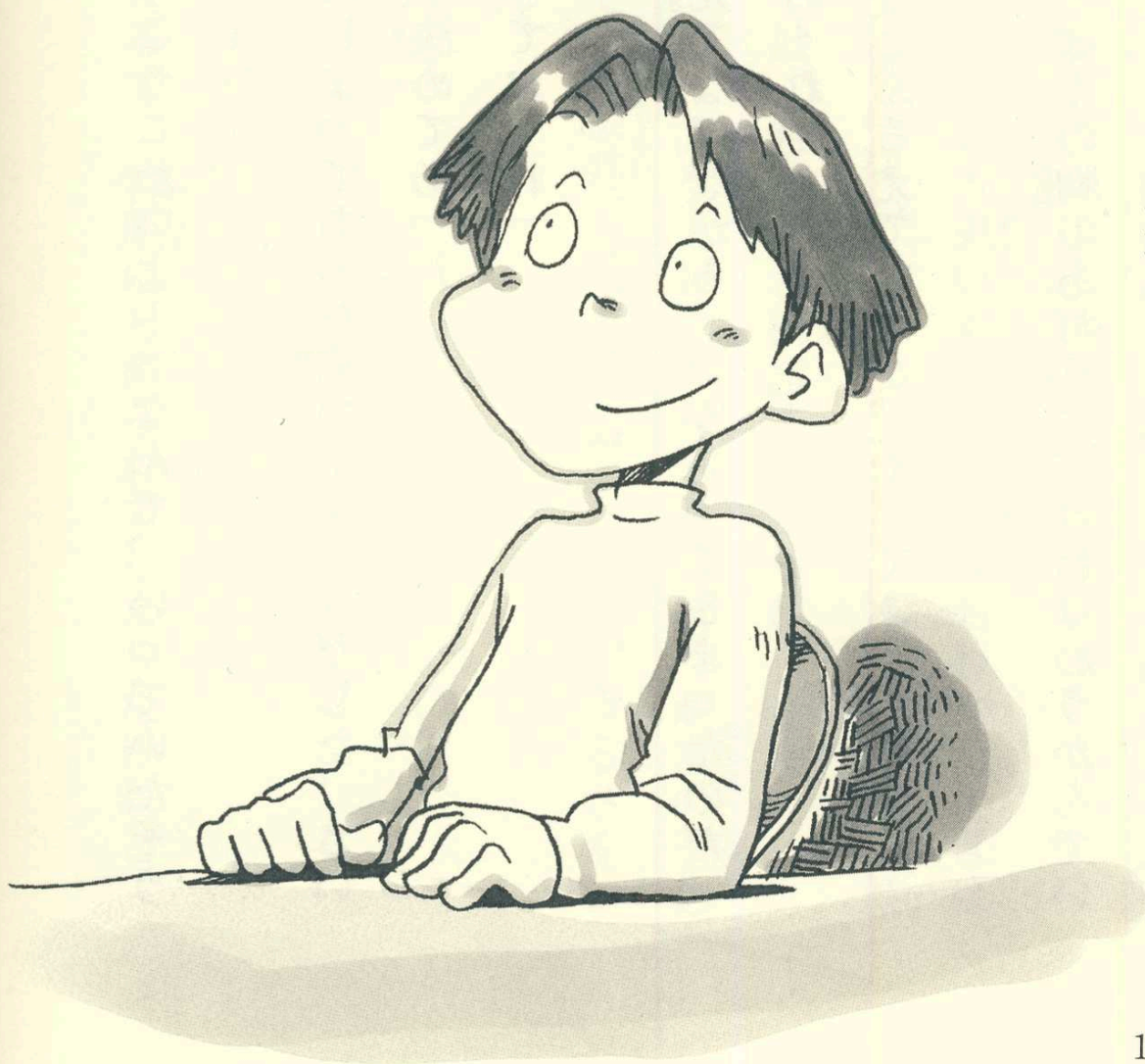
ぼくはひざの上のせて、指先でなでながら、こういつてしまつたのだ。

「猫の手、猫の手——。消えておくれ」

猫の手は、しばらく、ふるふるとふるえていたが、やがてふつと空気にと  
けるように、見えなくなつた。

さいごの毛が一本、しばらく、ぼくの胸のあたりに、ほわほわうかんでい  
たが、やがてそれも消えてしまつた。

これでよかったんだ。  
勇者はわらって見送るさ。  
さらば、猫の手。





●作家紹介●

金治直美（かなじ なおみ）

一九五七年、埼玉県生まれ。埼玉県在住。児童文学研究会「さわらび」同人。岡信子氏に師事。日本児童文芸家協会会員。この本が単行本第一作。ヘンなものやふしぎなことを、読んだり聞いたり考えたりするのが好き。

●画家紹介●

こぐれ けんじろう（木暮健二郎）

一九六六年、東京都生まれ。ニューヨークのアートスチューデントリーグ美術学校で絵画を学ぶ。子どもの本の仕事に『魔の四角形―見知らぬ町へ』（文溪堂）『銀色の仲間たち』（リブリオ出版）『200年いじめ伝説』（ポプラ社）「おもしろ語源話シリーズ」（岩崎書店）などがある。

かなじ なおみ

さらば、猫の手

岩崎書店 2001

125P 22cm (童話だいすき 17)

童話だいすき 17  
さらば、猫の手

二〇〇〇年九月二十九日 第一刷発行  
二〇〇一年九月二十五日 第三刷発行

著者 金治直美

発行者 岩崎弘明

発行所 株式会社岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二 〒112―0005

電話 〇三―三八二―九一三一 (営業)

〇三―三八一―三五二六 (編集)

振替 〇〇一七〇―五―九六八二二

印刷 株式会社KMS

製本 株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

NDC 913 ISBN4-265-06117-6

©2000 Naomi Kanaji & Kenjiro Kogure

Published by IWASAKI SHOTEN

Printed in Japan

岩崎書店ホームページ <http://www.iwasakishoten.co.jp>



# 童話だいすき

小学校中学年向き

一二〇〜一六〇ページ

1 合いことばはなんじゃ・もんじゃ 上條さなえ

11 じっちゃんはゆうれいになった 吉田道子

2 おじいちゃんの手品

山県 喬

12 ハムスターのチュー

茨木 昭

3 また来てマック

及川和男

13 あばね、ゲンさん!!

宮下全司

4 ダーサンと川のギャング

斉藤 洋

14 エリートなぼくと恐怖の笑い声 小林礼子

5 いいこといっぱい丘の上

矢部美智代

15 あたしが桃太郎になった日 山口 理

6 海をおよぐ大シカ

小林しげる

16 レタス畑のおくりもの あびるとしこ

7 めちやまちやごためぜ

バウル・マール

8 あいたかったよ、カネチン

林 洋子

9 としばあちゃんのオムレツ作戦

山口節子

10 子ども  
テレビ局 こちら事件現場です!

龍尾洋一

# 童話だいすき

- ① 合いことばはなんじゃ・もんじゃ  
上條さなえ 作／山口みねやす 絵
- ② おじいちゃんの手品  
山県 喬 作／水沢 研 絵
- ③ また来てマック  
及川和男 作／岡本美子 絵
- ④ ダーサンと川のギャング  
斉藤 洋 作／森田みちよ 絵
- ⑤ いいこといっぱい丘の上  
矢部美智代 作／福田いわお 絵
- ⑥ 海をおよぐ大シカ  
小林しげる 作／福田岩緒 絵
- ⑦ めちゃまちゃごためぜ  
パウル・マール 作／虎頭恵美子 訳／古味正康 絵
- ⑧ あいたかったよ、カネチン  
林 洋子 作／吉見礼司 絵
- ⑨ としばあちゃんのオムレツ作戦  
山口節子 作／長野ヒデ子 絵
- ⑩ 子ども  
テレビ局 こちら事件現場です！  
龍尾洋一 作／さかもと瓢作 絵
- ⑪ じっちゃんはやうれいになった  
吉田道子 作／渡辺則子 絵
- ⑫ ハムスターのチュー  
茨木 昭 作／藤田ひおこ 絵
- ⑬ アバね、ゲンさん！！  
宮下全司 作／夏目尚吾 絵
- ⑭ エリートなぼくと恐怖の笑い声  
小林礼子作／カワキタカズヒロ 絵
- ⑮ あたしが桃太郎になった日  
山口 理 作／伊藤重夫 絵
- ⑯ レタス畑のおくりもの  
あびるとしこ 作／藤田ひおこ 絵



9784265061174



1928393012006

童話だいすき 17  
定価(本体1200円+税)

ISBN4-265-06117-6

C8393 ¥1200E

